

『飛翔』 創刊にあたって

——人間が希望に生きられるのは、とめどもない精神の飛翔感によってである。——

総合科学部は、昨年6月に発足したまさに新しき時代の学部である。学部創設の過程においては、教官・事務官の力による所が大であった事は言うまでもない。しかし出発以後、その中心となり新学部を成長発展させていくのは、私たち学生に課せられた使命である。

大学紛争以後、大学の機関に学生の参加が認められることは稀である。それがこの機会に総合科学部広報委員会という形で、かなり発言権のある場が得られたということ（私たち学生は）慎重に考えてみる必要がある。

そこに教官・事務官の暖かい愛情を感じると共に、私たちは、内外の厳しい現状の中で、“自分たちの学部は自分たちの手で創っていくのだ”という総合科学部生としての誇りと主体性をもってこの仕事に積極的に参加していくことが必要であろう。

ここに創刊号を送り出すにあたり、私たちは、この『飛翔』を通じて学生・教官・事務官間のコミュニケーションがより一層深まり、そこに相互の信頼に基づいた学部の創造発展の道がひらかれることを望んでやまない。総合科学部に永遠の飛翔あれ！

学生側広報委員

総合科学部創設の回顧

目次

一 幸 山 氏

韓国の農村調査から
 花粉と環境科学
 法社会学の精神
 座談会「酔中放談」
 総合科学部創設まで
 新入学生調査
 私の夢
 学生のプロフィール
 Toward a cultural
 回顧と期待
 創設記念式典 挨拶
 " 祝辞
 " "
 " "
 " "
 学部の記録 人事異動
 各種行事

丸山孝一 3
 根平邦人 5
 伊藤護也 7
 学生企画 9
 荒谷孝昭 18
 三迫初男 21
 大番卓司 24
 学生企画 25
 シュルツ 28
 佐々木右左 30
 今堀誠二 33
 井内慶次郎 34
 伊藤秀雄 35
 植木健 37
 飯島宗一 37
 39
 40

編集後記

韓国の農村調査から

丸山孝一

私は1974年10月3日より半月間、当学部野口隆教授を中心とする韓国人移民研究プロジェクトの一環として、韓国慶尚南道陝川郡陝川面金陽里における文化人類学の立場からのフィールド・ワークを実施した。私に与えられた課題は、日本、特に広島地区から母村の陝川地区へ帰還した人びとの生活様式を当該村落の社会構造の中に位置づけ、日本での生活経験が母村への再統合に際してどのような意味をもっていたかを解明することであった。調査資料は現在分析されつつあり、調査自体が続行中であって、正式の報告書は別途刊行される予定であるが、ここでは、この調査に対する私の基本的な取り組み方、方法論の一端を述べ、また若干の調査内容を紹介してみたいと思う。

戦前、戦時中における韓国人の来日は年毎に増加し、広島県在住者も1943年末68,274名、1944年末には81,863名となった。特に後者の中には徴用（強制連行）による5,835名の労働者が含まれていた（内務省警保局）ことが注目される。徴用以外の自由意志で広島へ来た者の出身地は慶尚南道陝川郡が多かった。われわれが訪問した陝川郡金陽里71戸中20戸に渡日経験者がいたが、そのうち15戸は広島市とその郊外に住んでいた。

陝川出身の移民が広島に住み、戦後その一部が母村へ帰ったという現象は多角的に視ることが出来るが、われわれはこれを、異質な日韓両文化体系の直接的接触であったと考えている。なぜなら、具体的には成程、個々人の行動として表われている場合でも、あるいは単独で日本へ移民として来た場合ですらも、対馬海峡を渡来した以上、彼らは異質の日本文化に曝され、多かれ少なかれ、日本的な行動様式を身につけて、自らを文化化（enculturate）しなければならなかったからである。日本語の習得という一事を考えてみても、そのことは理解されよう。

一方、母村への帰還者にとって、日本での生活経験が長く多い者程、母村文化への再適応が問題となったようである。金陽里在住のK夫人（45才）は広

島市吉島に生まれ、中島小学校卒業で、日本語を話し、日本人の少女と全く同じ遊びをしていた。終戦直後、16才で父の故郷陝川面へ帰って来た時には、韓国語をほとんど話せなかった。日本語は、上手な人の多い金陽里でも彼女は特別に流暢であるが、韓国語の発音は今でも十分でなく、時々人から笑われるという。韓国文字は今でも全く読み書きが出来ないので、近くの村に住む同じ立場の姉と文通する時には、全て日本文でやりとりしている。K夫人のよ



（金陽里の農家 わら葺きから瓦葺きに変りつつある）

うに、日本生まれの二世で親の出身地に親と共に帰って来た人は少なくなく、その人びとは韓国文化に適應するのに多少とも問題があったようである。ここでは、一世の帰還者にとっては、韓国文化への再適應が問題であるが、日本で生まれ育ったその子どもたちにとっては、韓国文化はほとんど未知の世界であった。この際、日本における韓国人社会（家族や地域社会）において、どの程度、韓国文化が持続されていたかという点が問題となる。即ち、日本文化の中における韓国文化という、文化の重層的構造の中で在日韓国人は生活してきた。従って、移民による日韓交渉は、異質文化の単なる空間的接触であるに止まらず、移入された文化（ここでは韓国文化）の変化と持続性という時間的経過が問題となる。これは移民とその文化に関する一般の問題であり、この問題の解明には、われわれの場合、もっと在日韓国人社会とその文化の分析を必要とするが、

今日のプロジェクトでは、技術上の理由によって、この点の究明をまだ始めていない。

移民・帰還者による伝統的韓国文化の維持という点に関して興味深いことは、儒教的イデオロギーとこれに基づく行動様式の持続性ということであった。周知の通り、韓国では敬老思想が発達し、祖霊祭祀が盛んであるが、現実には私の予想以上のものであった。一例を述べよう。私は金陽里で里長（部落長）さんの家に泊めてもらっていたが、ある夜、里長さん一家や近所の人びとと共にテレビを観ていた。約2時間も連続して観た後、ふと里長さんの父親が小用に立った。その途端、若い里長さんはたばこを取り出し、むさぼるように吸い始めた。妙なことだと思ってみていると、まもなく父親が戻って来る足音を聞いて、里長さんはまだ長いたばこをあわててもみ消し、残った煙を手で追い散らそうとするのであった。後刻確かめたことは、年長者、特に父親の前で息子は決して喫煙してはならないという規範であった。大学関係者に聞くと、学生は教授の前では決してたばこを吸わないということであった。このような規範は、移民経験者も未経験者も同様に守っているようであった。

祖霊祭祀も日本より格段に徹底していて、例えば服喪期間が両親死亡の場合3年間、祖父母や父の兄弟で1年間などと定まっており、父系の高祖（父の父の父の父）までは命日に毎年本家の自宅で供養することになっている。（島根県のある禅宗では300年忌までしているのを見たことがあるが、普通日本では33年忌くらいで、50年もすればもう祭り上げである。）最近では、セマウル（新しい村）運動で生活の簡素化が叫ばれ、かなり略式が多くなったとはいえ、まだ伝統的な様式が強く残っている。移民経験者に聞くと、在日中は服喪の形式や程度は簡単であったという人でも、帰還後は伝統的に則った行動を示すようになった者もいた。これは在日中、韓国文化は中断ないしは稀薄化しながらも、帰国後、再強化され、他の村人以上に伝統指向をするようになった事例として注目される。

日本帰りの人びとが故郷でどのような受け容れ方をされ、自らどのように行動するかについては、日韓両国の国際的関係、在日期間、年齢、職業、居住形態等々が決定因子となろう。政治的、経済的に有力ではあったが、真に尊敬されることの少なかった日本への評価は、戦後一層厳しくなった。日本で比

較的恵まれた生活をしてきた人びとも、戦後のインフレや引揚げ時の混乱で、さほどの資産も持ち帰ることは出来なかったらしい。従って、日本帰りが社会的、経済的に特に高い地位にあるとは言えないが、金陽里の村に関して言えば、全体の社会階層が上層20戸、中層29戸、下層22戸、計71戸ある中で、日本帰りは、上層11戸、中層7戸、下層2戸、計20戸となっており、かなり高く評価されている（この評価は前里長（59才）の個人的主観に基づく）。同じ日本帰りといっても、徴用令動員による、いわゆる強制連行で北海道の炭坑や堺の軍需工場で働かされた人びとは、在日中、接触した日本人といえば「監督さん」だけで、外出もほとんどなく、韓国人仲間と労働と寝食を共にしていたので、日本語を覚える機会もなかった。そんな人が金陽里に2名いる。残り18名の帰還者は、自由意志で知人や親戚を頼って来日した人びとである。帰還者は全員、帰国後村落社会に再編入されるに際して、何らの社会的葛藤もなかったと言っている。それどころか、彼らのほとんどは肉親との再会を喜び、また歓迎されている。

われわれは、帰還者の母村への再統合に関して、いくつかの仮説を設定した。たとえば、日本で韓国人移民が排他的に集団的居住形態をとっていた者は日本文化の受容が難しく、帰国後は母村への再統合が比較的容易であったであろうし、逆に、単独で日本人社会にとび込んだ者は、日本化が比較的円滑で、日本化の程度が大きいほど、帰国後の母村への再統合は困難であったであろう。現在、更に新しい資料を追加しながら、この仮説に対する検討の作業を進めているところである。この他にも、やや専門的になるが、比較的多様な親族集団を内包する金陽里部落と、同じ陝川面の内容里という、単一の親族集団（氏族）が強い機能を果たす、いわゆる両班部落との比較研究も試みようとしている。

この研究プロジェクトは現在進行中のものであり、その成果については一切を報告書にまわさねばならないが、このような研究は一体どのような意義をもつ、あるいはもつべき筈のものであろうか。

第一に、この研究は移民のゆききを通じて異質の日韓両文化が直接接触し、変容してゆく過程を観察、検討してゆく機会を提供しており、この研究によって、文化変化および文化の持続性に関する文化動態の理論化に貢献する可能性をもっている。

第二に、この研究は、まさに学際的研究にふさわしい場を提供している。文化動態論はその多面性の故に、旧来の学問分野を横断する理論展開を要請するものであるが、その意味で文化人類学の総合科学的性格は、この種の研究に最も適したもの一つであろう。われわれの研究プロジェクト・チームは社会学班、医学班などから編成されている。

第三に、韓国研究そのものの意義を強調したい。筆者自身はアジア研究講座の一員であるが、正直に言って筆者の韓国研究歴は極めて浅い。最近韓国に関する出版物が多いが、一般にわが国のアカデミックな世界からの韓国文化に関する発言は、いくつかの優れた例外を除いて、極めて少なかった。そのことは、正式な韓国語教育機関が今日の日本の大学にいくつあるかを数えただけでも了解されよう。われわれは韓国の文化人類学者たちと協力しながら研究を進めているが、示唆されるところが甚だ多い。今後、この種の国際協力は一層推進される必要がある。

最後に、触れるべくして今まで触れなかった問題がある。それはヒロシマにおける韓国人被爆者の問題である。陝川への帰還者の中にも多くの被爆者が居り、「陝川原爆被害者診療所」も最近設置されたが、問題とすべき点がまだ多いようであった。これ

はヒロシマに住む人間として無関心ではおれない問題であるが、今回の研究ではとうていそこまで手が及ばないので、別の機会に譲らざるを得なかった。

われわれの訪韓は日韓関係を緊張せしめる数々の事件が突発した直後であったので、一部の食堂やガソリン・スタンドでは日本人客を拒絶する動きもあって、知人の中には、このような状況下での渡韓を思い止まるよう忠告してくれる者もあった。日本外務省の呼びかけもあって、日本人観光客の訪韓は前年比で10分の1に激減した。しかし、このような国家間の緊張は、私の滞韓中、少なくとも個人的経験としてはほとんど何の影響も受けず、逆に却って、こうした国家間のマイナス要因を埋めてなお余りある個人的友好関係が形成、確立、あるいは再確認されたことは何よりも有難いことであった。ある場合には、両国間の緊張関係の故にこそ、個人的レベルにおいて、これを埋めてたっぷりおつりのくるほどの友好関係が形成されたと思えることすらあった。個人的な友好と信頼の関係は、専門のフィールド・ワークにおいて不可欠の前提であるばかりでなく、個人的体験としても甚だ愉快なものである。これをいいことに、近く韓国の学界やフィールドの親しい人びとに会うため、彼地を再訪する予定である。

(アジア研究)

花粉と環境科学

根平邦人

花粉の役目は何といても受精にある。これに関与する花粉は複数からなるが、胚のう内の卵細胞まで達するのはただ1個の花粉である。その他の数えきれない多くの花粉たちは、むなしく空を舞い、やがては地表に落ちてしまう運命にある。なんと無駄の多いことか。スギであれば一つの葯の中に3,300個ほどの花粉ができる。したがって一つの花に13,200個もの花粉が生ずることになる。地球上のすべての植物が、このように多くの花粉を生産するので、大気をさまよう花粉はたいへんな数にのぼる。花は季節を伝える。したがって空中に舞う花粉の種類と花粉量も四季を反映したものとなる。グリセリンを適量塗ったスライドガラスを野外に放置しておくと、その上に花粉が飛んできて、付着する。このように

して私たちは空中花粉を採集することができるが、これら花粉たちを季節ごとにとらえ、統計処理し、グラフに表わしたものが花粉分布図である。

私たち人間の健康状態は、気候の変化に随分と左右される。気候変動の激しい時期にはなんとなくからだの調子がおかしいし、風邪もひきやすい。これは気温の上下が急なため人間のからだにそれが順応しきれないこともあるが、他のファクターもある。たとえばアレルギー疾患がそれで、季節の変わり目に鼻がつまったり、くしゃみが出たり、じんましん、ぜんそくの発作もある。さらには胃腸病や神経系統の障害も生じてくる。すべてがそうとはいきれないが、これらの症状はアレルギー性のものが意外に多い。原因を付きとめると、これらは大気中のいろ

いろいろの微粒子がアレルゲンとなっている場合が目立つ。空中を舞うチリはもちろんのこと、カビ、バクテリア、ダニ、花粉や胞子がそれらである。とくに花粉や胞子は季節の変わり時に多い。すなわち気圧配置の変動、花粉の種類と量それにアレルギー性疾患の三者は相互に関係しあっているとみてよい。病気の発作のまえぶれに何らかの規則性が発見できれば、未然に発作をくいとめることもできよう。ブタクサの花粉が因でおこる花粉病なるものは、この点一番よく研究されていて、そのシーズンの秋口もなれば、花粉地図を作り、患者に対して配慮もなされている。とにかく気候と人間のからだとの間には、私たちの眼ではとてもとらえられない生物たちが、何らかのかたちでかかわっている事実が少なくないのである。これに関係した空中生物の研究は、わが国ではほとんどなされていないのが実情である。

総合科学部が認可されようとしていた昨年春ごろ、私は自分の研究の未来像について真剣に考えていた。私は自然環境講座に所属している。現在ますますめてきた仕事を環境科学という観点から今一度見直していた。その方向づけもほぼ定まった。同時に、どこの大学のどの学部でもなし得ないユニークで総合的な研究は何か。このことについても深く考えてみた。そのときふと私の頭に浮んだのが、この花粉の生態のことであった。なぜか以前から私は花粉にこだわっていたためだろう。私は早速、新聞の天気図を切り抜き、花暦をそれに添えるという簡単な作業にとりかかった。中学生並みの幼稚な資料収集である。まずは気圧配置と開花との関連性を実感としてうけとめたかったからにはかならない。「昭和49年5月17日(金) 晴れ。移動性高気圧接近。福山、大竹地方に光化学スモッグ発生。カラライポプラの花、空を舞う(大学北門付近のポプラ)。ムラサキツユクサの花(つぼみ多し)。ハクチョウゲの花(満開)。エゴノキの花(白)。ぜんそく患者の発作の報……」といったようにメモした。この資料収集は5月から8月末まで続いたが、結局途中で挫折してしまった。これは当然のことだ。データがチャチで、役に立たないことに気づいたからである。しかし、空中花粉もあわせ、より綿密で正確な資料を集めれば、私のねらうものにいくらかでも近づいていくことは間違いない。

これまで、花粉と人間のからだとの関係に焦点を合わせすぎたきらいがあるが、空中花粉に関する

基礎資料は当然植物の分布と密接に結びついているし、また大気汚染の指標植物の選定といった植物学の応用方面にも伸びる仕事でもある。

花粉たちは古い時代にも地球上に降りそそいでいた。それら花粉の遺体は、今日では土の中に埋もれている。さいわいなことに、花粉は二重の固い膜構造をもっていて、これが化石として保存される因となっている。その上、この膜はそれぞれの植物で定まった模様をもっていて、これらの構造は、すこしの化学的処理でも崩れることがない。この花粉の特性を利用し、古環境のすがたを探るのが花粉分析といわれる研究分野で、地質学、地理学、植物学の接点に位置する学問である。ボーリングによって古い土壌を採集し、それを各層にわたって花粉を同定してゆき、統計処理する。その結果から過去の植生を知ることができるのである。小さな花粉たちが、地球の歴史を多く語ってくれる。植生の変遷から気候変動もつかめる。花粉化石の中にみられる栽培植物の花粉量を計算したりして、ある地域の農耕のパターンを動的に把握することもできる。これは人類史と結びついている。このように古い花粉は予想以上の多くの情報を私たちに提供してくれる。

植物の進化上の問題を解く鍵も花粉の中に存する。ある植物のすべての情報が単細胞の花粉の中にたまり込まれていることからいえば、花粉自身に備わった形態の意味するところは極めて大きいといえる。花粉外膜の変化を理解することによって、ある植物群の進化の跡をたどることも可能である。胞子をもつシダやコケと花粉を有する顕花植物との分岐点をこれら胞子や花粉を手がかりとして探ることも不可能ではない。しかしここまでくると植物形態学だけのアプローチでは追いつかなくなってくる。化学者や地質学者など生物学周辺の学問分野の人々が協力してはじめてなされる総合的な研究となる。

地球上の資源開発に役買っているのも花粉化石である。花粉化石の分布と地層の資源との関連性を知り、それに基づいて石油層や石炭層を新たに探り当てることができる。アラスカや北欧、南米などでは、この方法で石炭層がかなり見つかった。このように地下に埋もれた花粉化石は応用面にも意外なほどに広く役立ってくれている。花粉と人間とは、私たちの気づかぬ奥深いところで、しっかりと結びついているのである。

私はこれまで花粉を詳しく観てきたわけでも、そ

れについて多く知っているわけでもない。花粉に関する論文も書いたことは一度もない。それなのに私は厚かましくも花粉のことについて述べてきたのはそれなりの理由がある。それは私自身がアレルギー体質で、じんましんやぜんそくで悩まされた経験があり、人並み以上に花粉に関心を寄せてきたことが第一である。アレルギー性の病気で苦しむ人たちのためにいくらかでも役立ちたいとの願いと、花粉へのこだわりから、いっそのこと花粉でもやろうかと思っただけのことかっつはあった。

私は現在、「植物の進化」の仕事をおこなっている。なかでもコケの胞子を取り扱ってきた。胞子は花粉ほど派手ではないが、仲間同士である。したが

ってコケの胞子から花粉そして花粉の生態へと考えが広がっていくのもむりからぬことである。

昨年10月、わが自然環境講座に安田善憲氏が加わった。花粉分析のテーマをもつ新進気鋭のナチュラルリストの彼は地理学と植物学のかげ橋の役目を果してくれるだろう。私は彼から花粉の多くを学びとろうとしている。無能な私に何もできないかもしれないが、時間の許すかぎり、花粉とのつきあいを始めたい。花粉は小さく、地味だが、これから大きく広がってゆく“花粉の科学”を私は見逃すわけにはいかない。空中を飛ぶ花粉のごとく、果てしない空論を展開してみた次第である。

(自然環境研究)

法社会学の精神

伊藤護也

法社会学の性格と方法については、近年さかんに議論されているが、理解の完全な一致は今のところみられない。しかし、社会学界へもその内容が紹介され、社会学研究者との共同作業も進んできているというものの、現在のところ法律学の一分野であると考えられていること、社会科学における境界科学ないし領域間科学として内外ともに近年その発展がめざましいことは確実である。法社会学の性格・方法や個別的課題の検討がここでの問題ではない。私は、この新しい学問分野がなぜ発達してきたのか、そこに流れる精神といったものは何なのかということについて、ほんの少々ふれてみたいと思う。その一つは、官僚法学の批判が法社会学形成の出発点・基礎であったこと、もう一つは、法社会学が生きながらえ、ますます発展してゆくためには、民主主義運動と結合した法学、つまり民主主義法学を志向する以外に方向がないこと、この二点をのべようと思う。

法学が、そして法学研究者が、人権を擁護する側にあるかそうでないかが、今日ほど問われているときはない。法社会学の発生自体、過去において法学の果たした役割に対する一定の反省が前提となっている。法学が国民の中に根づいたものでなく、支配の学になってしまったことへの反省、つまり官僚法学としての法学への自己批判が、そこに働いているこ

とは否定できない。この官僚法学批判・人権擁護こそ、日本の法社会学発生以来の精神であるし、われわれの堅持すべき第一の観点でなければならないと私は考えている。これらの観点なしには、法の科学的分析がありえないということを、日本近代法学の百年の歴史は教えている。(日本近代法史の本格的検討はわれわれの第一の急務であるといわねばならない。)

法律学の内外にわたってこの官僚法学をもっとも本格的に批判したのは、末広巖太郎(1888~1951)ではなかろうか。彼は、大正年間以降、日本の法社会学を自覚的かつ本格的に展開した最初の研究者であるが、この法社会学の展開と官僚法学批判とが表裏一体の関係にあったことにわれわれはまず注目すべきである。彼の名は、案外広く知られているかもしれない。戦前すでに初代の日本水泳競技連盟の会長や日本体育協会の理事長をつとめているし、戦後では実質的に初代の中央労働委員会の会長としての活躍、彼の民法研究室あるいは彼の指導にあたった東大セツルメント活動の中から多数の研究者——仁井田陞、福島正夫、戒能通孝、川島武宜、平野義太郎、風早八十二など日本の法社会学を背負って立った人々——を輩出したこと等、彼の名が語られる機会は多い。このガンチャンこと末広巖太郎は、日本資本主義の急速な発展につれて社会的諸矛盾が露呈

し、都市でも農村でも多くの社会問題、法律問題が続出した第一次大戦後の時期にあって、市民社会の立場から国家権力の非合理性を追及し、官僚が国家権力を笠にきて市民のうえに権力をふるうことを徹底的に批判した。法学エリート・高級官僚の養成機関であった東京帝国大学法学部教授としてはまさに異例のことであったため（もとより、そこには体制内改革のリーダーはよくでてくるが）か、大いに世間の反響をよぶこととなった。しかし、その内容は当時あっては勿論のこと現在の日本においてもそのままあてはまるし、その批判は冴えている。たとえば、『嘘の効用』所収の「役人の頭」（大正11年6月、東京日々新聞へ発表）にはこうある。「『人間の世界』から借りて来た『役人』がそのむかし『役人の世界』に住んでいた代りに、今度はまた新たに『法律の世界』といふ新しい別世界に住みたがる」から官僚主義がはびこるのだ、と。こういった角度からの批判は、官僚主義批判の古典的な形態であって、今日ではこれだけでいくわけにはいかぬことは勿論であるが、しかし法学者や官僚に根づいた法学的世界観の批判という課題は今日でもわれわれの当面するものである。昭和6年には「役人学三則」（『改造』8月号）と題して、「官海遊泳術」のまことに皮肉な三カ条をかかげている。

第1条 凡そ役人たらむとするものは、万事につき成るべく広く且浅き理解を得ることに力むべく、狭隘なる特殊の事柄に特別の興味を抱きてこれに注意を集中するが如きことなきを要す。

第2条 凡そ役人たらむとする者は法規を楯にとりて形式的理屈をいふ技術を修得することを要す。

第3条 凡そ役人たらむとする者は平素より繩張り根性の涵養に力むることを要す。

おそらく、こういった批判にも、今日では限界があらう。しかし、「法王よりカソリック」よろしくこわっぱ役人がより役人的でありうることを、本物の役人は必ずしも法に拘束されず柔軟に臨機応変の措置をとる一方（この側面を強調する現代の新官僚法学に注意せよ。法律学そのものも法社会学の重要な検討対象である）、国民の権利主張に対しては法を厳格に、杓子定規かつ三百代言的に運用しがちであること、裁判官にもあるいは研究者にも官僚的資質を求める動きがなくはないこと等を考えてみると、

日本の現状が、上の三カ条と全く無縁とはとてもいえそうにない。国家権力の行使によって市民が損害をうけた場合、今日では昭和22年の国家賠償法によって救済をうけることになっているが、絶対主義的天皇制のもとで、このことの必要性を早くから提唱したのも末弘であった。

末弘の権力不信の法思想は、従前の官僚養成の概念法学的解釈学に対する批判においても当然に発揮された。詳しくは講義で検討するほかないが、青年我妻栄をして、「立っている足許の崩れるような不安と焦燥」の感に陥れたことはよく知られている。法の解釈や判例研究において「事実」の問題が余りも軽視されていたというのである。大審院の判決集の編集方針を改めさせたのも末弘の功績である。それはともかく、事実の尊重、現実に対するすどい目玉が法社会学の一つの精神を形成してきたことは疑いえない。現実をして語らしめよ。事実の軽視は結局その事実の肯定に連なる。現実の矛盾に目をつむれば現状に流される。その矛盾に目をしかと開くことによって、学問の科学性は保障されるのであるし、その成果の上に立って矛盾の一方に荷担することを通じてはじめて問題が解決される。その解決の方向は市民の人権保障以外ではありえない。

こうみてくると、法社会学が単なる権力不信の法学ではなくて、民主主義法学の一環を形成すべきことは当然であるといわねばならない。法社会学は権力から離れるのでなく、これを分析するのである。法社会学と民主主義法学の統一の典型は、戒能通孝に見られるが、この方向を一そう追求する必要があると思っている。われわれは、現代日本資本主義の諸矛盾から離れて、第三者であることはとてもできない。例えば、インフレ・物価問題、社会保障・住宅政策の貧困、公害問題、農業の荒廃、合理化による労働条件の悪化などに当事者でないとはいえない。民主主義をめぐる問題は複雑であるが、法社会学は、民主主義の立場にたつと「偏向」で科学性と相容れないという考えや、支配者の側による時間表によって歴史は順次反動化されてゆく、民主主義はそのかくれみのだという発想を拒否するところに成立つものであるといつてよい。民主主義法学は科学的法学と統合されねばならないし、その可能性が生まれてきているところに現代における民主主義の歴史的意味がある。公害問題についていえば、真理は公害企業の企業責任を追及する被害者住民の側にあったのであ

る。これは、人権擁護の立場に立つことが科学性を阻害しない（いや促進する）ことのほんの一つの証左にすぎない。法社会学は、民主主義とは何かを不断に問いながら、それから離れず一そうおし進めるものでなければならないであろう。

私は、岡松参太郎について伝えられるつぎの話が好きである。それは、ある人が博士に、博士の行なっている民法研究はあとどの位の旧時を要するのかと尋ねたのに対して、博士はあと200年かかると答えたという話である。型破りの大人物らしい博士の言葉としておもしろいし、われわれもそうありたいものだとおもう。現在の法体系や、支配的な法

学がそもそもそんなに長い寿命をもつものだと私は考えていない。これに対して、これからの歴史の進路を見定めようとする民主主義法学は、どうしても相当の長期の展望をもって発展するものでなければならないだろう。そのためには個人個人としての研究がしっかりと行なわれることが必要であるが、少人数の者が華々しく舞台上に立って脚光を浴びることによって行なわれるものでもなかろう。その意味で学生諸氏もふくめて共同作業が必要とされるのである。そのために努力しようとは私に思っている。

《座談会》

—新春酔中放談—

企画 広報委員会学生委員
出席者 式部 教官（地域文化コース）
山田 教官（社会文化コース）
兼田 教官（情報行動科学コース）
荒谷 教官（環境科学コース）
上垣内教官（ ” ” ）
三迫 教官（学生相談室長）
田淵 教官（英語、広報委員会）

学生 A （地域文化コース志望）
B （社会文化 ” ）
C （情報行動科学 ” ）
D （環境科学 ” ）
E （地域文化 ” ）
F （環境科学 ” ）
司会 （学生側広報委員2名）

司会…「我々が総合科学部に入学してから、はや半年の月日が流れ、学生、教官それぞれが現時点においては、いろいろな矛盾に気付き、それぞれの立場で悩みをかかえられていると思われる。そこで、新春にあたり、教師と学生がお酒でも飲みながら、お互いに意見をぶつけあう中で建設的な何ものかを探ることができればと思ひこの企画をたてました。そういう趣旨ですので、日頃授業などでは発言しにくいことも含めて腹藏なく語りあっていただければ幸いです。

それでは話の糸口をつかむ意味から、お集りいただいた各コースの先生方に、各コースの紹介なども兼ねて、現在背負っている研究、教育における課題について地域文化コース、社会文化コース……という順でお話ししていただきたいと思ひます。」

式部…「私は、地域文化コースの中で、ヨーロッパ研究に属していますが、個人としてはギリシャ哲学・思想の研究をしています。ヨーロッパコース

は、将来、多方面に渡るスタッフを充実してゆき、一面ではヨーロッパ文化についての基礎を研究をするとともに、他方ではヨーロッパの現在の政治経済面で働ける人を作ることを考えています。

地域一般で言いますと、一つにヨーロッパを研究するにしろ、英米にしろ、日本文化についての親しみ・知識というか、関心をだれもがもつようにしていきたい。我々は、日本について、歴史は長く、資料も多いにもかかわらず、ほとんど知らない。大学のカリキュラムの中でも日本のものが少ない。こういう事が、日本人の外国・自国についてのものの見方に影響しているんです。こういう点から日本文化についての実際の素養が必要だと思ひますね。

もう一つは、これまで我々はアジア地域を neglect してきたと言ひますか。アジアについての親しみが少ない。ここに第二のポイントを置きたいわけです。その為に、アジア研究のスタッフをどしどし入れる必要があると思ひますね。

次にもう一点、外国語の能力を地域研究者だけでなく、総合科学部生が充分もてるようにしたいんです。たとえば、従来の日本の文科の訓練ですと、外国の資料を読んで使って勉強できるが、実際に日本研究をやった人が、外国に行って充分駆使できない、あるいは、政治経済面でも、いわゆる後進国の人の方が、外国語を使う能力がすぐれているかもしれません。日本人は、能力はありながらしゃんぼりしているという傾向があります。ですから読める程度までに、話したり、書いたりする能力がほしいと思います。

この三つのポイントぐらいは、地域文化コースの組織面、カリキュラム面において、考えてゆく重要な事だと思えますね。」

司会…「先生、そこで研究の面から何か。」

式部…研究の面では従来の個別研究がなされて居りましてね、これを、新しい総合的研究に発展させるわけです。この方策としては、現在の科学研究費の制度を利用して共同研究をやることです。すでにアジア地域研究に関してヨーロッパにおいても教養概念という形で共同研究が企画されております。

山田…「社会文化コースは、技術開発関係と社会構造関係の二つのコースがありますが、そうした理由の第一に、社会的な問題は、非常に複雑な様相を示していて、色々な領域が重なり合ってきていますので、従来の社会科学、たとえば法学部、経済学部という形では、充分カバーできない面が出てきました。それに対して、総合科学と言いますか境界領域と言いますか、そういう形でカバーしていくことが必要でして、そういう事をやっていきたいという事が一つです。それから限られた定員ですから贅沢な事はできないので、よく言うんですけれども、総合性、現代性、国際性のスローガンで、現代の総合的アプローチを必要とする社会的問題にアプローチをし、政経学部その他と密接な関係をもちながら、政経学部で十分できない分野をカバーし、相即相補で広島大学全体の社会科学の研究・教育の充実に資したいと考えています。それから、目下頭の痛いことの一つは、人事でありまして、とにかく優秀な方に来ていただきたい。まあこれは他のコースでも同じで、大変な労力を要することです。もう一つは、学生諸君にどういったカリキュラムで私がさっき申しましたことを実際的にやって行けるか、そのカリキュラム作りです。この点が一番緊急の問題で、私どもも苦

勞しています。人事は学生側がタッチしにくい面ですが、カリキュラムについてはこの機会を貸りて、学生諸君の積極的な関心と協力をお願いしたい。」

兼田…「情報行動科学コースには、情報行動基礎研究講座と人間行動研究講座という二つの講座があります。ここでどういったことを研究するか、私なりに申しますと、自然科学、物質科学はご承知のように非常に進歩していますが、それにくらべて、「人間とは何か、生命とは何か」という問題に対する解答は非常に遅れているのではないかと思います。

今日一番問題になっているのは、「人間とは何か、生命とは何か」という問題だろうと思います。それでは、この問題を追及する学問をなぜ情報行動科学というかと申しますと、ヒトをふくむ生物は、それぞれ特有の個性をもった構造と機能を形成する作用をもっています。そして形成されたその構造、あるいは性質なりというものが機能するとき、それを自己制御あるいは自己調節しています。情報というのは、人間・生物・自然を形成し、それを何らかの形に組織化し、その組織構造を刺激し、動かして文明・文化を生産し、それらの動き・流れ・行動に影響し、制御しているもの、ならびに調節するものがあります。したがって、人間・生命の本質の追及は、人間の情報行動を解明することであると考えます。情報行動基礎講座では、人間の情報行動を数学的・物理化学的・生物学的に研究しようとし、人間行動講座では、それを生理学的・心理学的・教育的に研究しようとしています。大切なことは、これまでのように狭い専門領域にとじこもらないことです。今日は情報化時代といわれていますが、それはジャーナリスティックな意味でなく、人間の情報行動研究が社会的・学問的な要請であるということだと思えます。

具体的に情報行動科学の性格を説明しますと、目的は上述のとおりで、対象は人間の情報行動です。そして、この学問を遂行する方法は、それがまさに総合的ということで数学、物理学、化学、生物学、それから心理学、教育学、できれば哲学、倫理学を専攻した研究者が共通の目的意識をもって、協力して人間と生命にアプローチしようというわけです。今まで生物学という学問はありましたが、それはとかく狭く、生命あるいは人間に対して断片的な認識しか与えていません。その原因の一つは方法にあると思えます。また人間とは何かという問題は、哲学

を含む人文科学のそれでもあります。人間は社会的存在であるということから社会科学の問題でもあるんですが、それをもう少し自然科学的に、具体的に、客観的に、実証的に追及することが要請されているのではないかと思います。何しろ情報行動科学は新しい学問体系でして、今日まで、人間・生命の本質追及を情報行動科学のように総合的にやった人はい



ままで、日本にも、世界にもいないと思います。まあこれからもこういう広大で重要な課題を一人で研究することはできないし、現在のスタッフでは量的に、また質的に足らないので、私達は全く新しい意識で研究体制やカリキュラムを考えなくてはならないと思っています。当面は社会文化コースと同じように、人間・生命の立派な研究と教育ができる人に来てもらってそれをうまくオーガナイズして、情報科学の理念が実現できるようにせねばならないと思います。

司会…「では今度は、環境科学コースの上垣内先生、荒谷先生をお願いします。

上垣内…「御存知のように、環境科学コースには基礎科学・自然環境の二つの講座があります。果してこの二つの講座名で表わされるような実値の内容をもったコースであるかという点については、学生諸君にも疑問があるでしょう。教官の一部にも、そんな名前をつけたことが間違っているという議論も出ています。だけど、これは、その人その人のコースに対する独自の認識をもっていらっしゃる為でしょう。そこで私の個人的な見解を申上げることになります。

そもそも科学するという事は、本質的には対称を細分化して研究するという事だと思います。例えば、物質について考えますと、分子・原子の構造か

ら窮極的には素粒子の問題までたどりつきますね。そういう形で進歩してきたのが、従来の自然科学の進歩なんです。しかし、現在それがゆきづまっていると思うのです。

学問の深化・発展は自己の内抱している問題から、当然のことながら、over-specialization に陥らざるを得ません。しかも、今までは細分化して得た information を、そのまま linear-combination すれば、つまり、バラバラに分解したものを再びつなぎ合せ組立てることにより、全体的統合が可能だと安易に考えていましたが、実はそうじゃないようですね。最近の科学技術の発展と公害問題はその例でしょうね。そこで、分化・再構成のパターンを変えて、数学なら新たに nonlinear な数学をうちたてるといったような発想の転換を計ることが必要ではないでしょうか。

こういう事が無い限り、現在の科学のゆきづまりは、解決されません。だから、この意味では、環境科学の名を借りて、いわば細分化された専門を専門としてやるのではなく、全体的視野に立った科学をやるという形で理解してもらいたいわけです。

一方では、現在ジャーナリスティックに言われている環境保全、環境予知問題に、全くノータッチでいくのかということでもありません。それらは全体的視野に立った問題ですから将来、総合化のできる素地を作る為に、そういう問題に手をつけられる基礎を、学部段階に十分つけてもらいたいのです。これは、総合的な研究のプロジェクトを組めるように、物理・数学・化学・生物・何でも、それぞれの自然科学としてのミニマムエッセンシャルというものを身につけてもらいたいわけです。これが環境科学コースの狙いだとは私は思います。

人事についても、従来から特に環境科学を柱としてきたのではないから、スタッフがいるわけではありません。そこで新しい分野のスタッフに誰を迎え、どんなチーム作りをしていただくかと言ったことは、今後の重要な問題だと思います。」

荒谷…「僕は自然環境研究講座に所属していますが、環境科学をすばらしい学問として建設してゆくことについて真剣に考えています。人類にとって自然界も生物界とともに環境であり、人類は生物としての物理環境と社会共同体としての社会環境によって制約されているのです。人類生存の道は単に自然科学だけで解決できるものではなく、陸、海、空での物

質・エネルギー転換すなわち自然システムとそこの中にある生物システムとの巧みな交流によって、しかもそれらをダイナミックな形でバランスさせなければなりません。したがって、トータルシステムすなわち地球全体をどうしたらよいかという環境問題は、既成の学問だけで解決できるものではなく、いわゆる学際的なアプローチが必要です。僕自身が過去20数年間と取り組んできたイン・ヴィトロな有機化学反応論をダイナミックなイン・ヴィボの場にあてはめようとしても、自然システムあるいは生物システムはなかなか相手にしてくれません。そこで環境要因の個々の生物種に対する効果や種間相互の作用にも視点を向けながら、非常に狭い分野ながらも生きたものを対象に、物質あるいはエネルギーの転換過程を静的なものから動的な形でとらえようとしています。いかえれば自然界、生物界の諸現象をそのままの姿でとらえようとしているわけです。それには自然システムのもつ性質を多角的にみなおすことから始めなければなりません。だから、目前の公害防止に狂奔するだけでは不十分で、生態学、形態学、生理学、地学など基礎的に勉強しなくては自然、生物、人類社会を含めた地球全体をみる事ができないように思います。」

司会…「ありがとうございました。今までの先生方のお話に対する疑問、要望など、学生側からの意見、質問を中心に議事進行したいと思います。」

学生A…「私は地域文化コースへ進もうと思っている者ですが、今のカリキュラムでは卒直な所、他の学部と何ら変わらないし、新しい学問をやっているとは思えないので四月から大幅に特徴的なカリキュラムがほしいです。ゼミ形式の講座を他学部以上に開いてほしい。ゼミ形式にすると必然的に自分の受け持ちの所はやらざるを得なくなると思います。このままだったら、ただこの学部の卒業証書をもたらだけの様な気がして……」

司会…「今の意見に対して、式部先生何か」

式部…「現在の総合科学部の教授は、一面では、一般教養をやっている状況で、全員が学部生に十分対応しているわけではありません。二年時には、ヨーロッパ研究ならヨーロッパに関する特別なセミナーをというようにセミナーを開設するつもりです。でも今一番問題なのは君達が総合科学部生だという自覚がほしいということです。セミナーでやりたいという願望は私達にもあるのですが、やはり基礎を

しっかりやっていないと実質的な中味は本当には身につかない。今でも初年度から独・仏語6単位、外人講師のセミナーも、もうけていますし、ある意味で君達の意欲が足りないとも言えるんじゃないかな。それから例えば仏政府でやっている給費留学生制度なんかでも本大学も含めて今までの方式で年に10名ばかり行きますし、やはり本人がやろうと思って努力すればどんな状況だってやれると思います。ですから君達が、語学なら語学のやりはじめにあって不安を持つのはわかるのですが、大いに“たたみの上の水練”を積極的にやってほしいと思うのです。」

司会…「他にありませんか？」

学生B…「僕、社会文化コースに進もうと思っている学生ですけど、ソ連についてやってみたいと思っているんです。構想だけで無理かもしれませんが、ソ連の環境問題とかをアメリカと比較してみたいのです。」

そういうわけで環境科学の方もお世話になるし、比較の観点から地域研究にもお世話になる。又、当然本籍地の社会文化コースにもお世話になると思います。その場合ですね、僕としては、本当手前味噌なんですけど、総合的に解釈するようなゼミナール・講義が欲しいんです。今まで色々便覧をみてみますと、多くの必須・要望が有ります。今まで講義を聞いて、多くの知識は与えられるんですが、如何にそれを連合・関連させていくかというのが、よく解らない、暗中模索、無理なんですね。それぞれの分野の専門知識を関連させるような、うまくいい得ないんですが、そういうふうなゼミ・講義はとれないんでしょうか。又、ソ連に関する講義はどのようになってるんでしょうか。」



山田…「うーん、難しいですね。(笑)あなた、たまたまソ連ときますが、他の方は中国と言うかもしれません。(笑)まあ、アメリカと言うかもしれませんね。すべてそこに応ずるとしますと、膨大な人間を備えなければならない。私個人の考えとしては、社会文化コースですと限られた先生ですから、完全にすべての問題をカバーする事が出来ない、そこでどこかに特徴を持たせたい。私は政経学部との関係を考えてたり、あるいは、全国の社会科学の状況を考えてたりして、社会主義というところにポイントを置きたい。そういう上での、比較社会体制もカリキュラムの中に入っております。」

学生B…「具体的に総合的な講座は、どの学年になると学べるのですか。大学院からですか。」

山田…「私は専門課程から出すつもりです。諸君が社会人として生きていく分に困まらないものは、学部段階でつけるべきだと思う。」

さらに深くやるとなると、他のコースも同じですが、やはり大学院だと思えます。」

学生C…「今のカリキュラムの事ですけれど、僕の進もうと思ってる情報行動科学コースは、文科系と理科系の接点に位置する学問をやる所で、高校時代、文科系と理科系に分けられていた僕たちにとって案外やりにくいんですね。ところが、現行のカリキュラムだったら、要望も必須も、ともかく厳しい規制が無いわけです。つまり自分に身近な科目だけ取っていても、たいして差しさわりがないということです。だから、どうしても規制が少なくなると、安易な方向へ流れてしまうと思うんです。もう少し要望とか必須とかを多くして、このコースに見合ったような方向に僕らを無理にでも向けさせるという事が必要なんじゃないでしょうか。単に情報行動科学コースに限らず他のコースでも、他学部比べて、僕らの学部はそういった規制が少ないように思いますが、その点今後のカリキュラムはどのようになるのか御伺いしたいと思います。」

上垣内…「それじゃ、私の方からお答えしましょう。カリキュラムの基本的な考えの中には、なるほどあなたのおっしゃるように、方向づけの為に非常に厳しいものにする方がいいという見方もあります。逆に、そんな風に縛らなくても、liberal-arts方式でやった方がいいんじゃないかという見方もあります。これだけはミニマムエッセンシャルだから、これだけは、ぜひ学部段階でやった方がいい、それ

を136単位の内100単位ぐらいピシッと決めて欲しいとあなたは言うんでしょ。しかし、それはあなた個人の考えであって、その反対意見も含めて多様な要求があると思うんですよ。だからそのへんの妥協点で今のカリキュラムが出来あがっているんですよ。あなたの場合、誰か先生の所へ行って、『私は将来こんな事がやりたい。それには、どれだけのものを作っておかなければならないか』といった様な事を聞いてみるのです。そうすると、どの先生でも教えてくれますから、それを参考として自分自身でカリキュラムを立ててみてはどうですか。大学に入ってからには自分で勉強するんだ、自分でプランを立てて自由に研究するんだと考え、そして私はこういうカリキュラムでやりますと宣言し、それが教授会で認められれば、もっとも認められればというのは、安易な方向じゃなく、今のカリキュラムとははずれてはいるけれども、充分教官方を納得させるものだったら、認めましょうというんですから、それでちゃんとあなたの要求も通るわけです。そういった事が出来ないはずはない。ともかく、他律でなくて、自律でやってもらう方がいいんです。」

学生C…「エート、先程、僕の考えを述べたのですが、そもそも、僕がそう考えるようになったのは、入学時のあのガイダンスの貧困さからです。というのは、たとえばある必須の課目を取るには、どうしてもそれを聴く前に、あるいは並行して、聴いておかななくちゃいけない課目というのがあると思うんです。入学して半年たってその必須課目を取ろうとした時に、前期に本来なら取れた、その足場となる課目を見逃して、必須課目をとることさえ出来ないという事も起こるわけですね。事実、そういう意味で、来年の新入生には、もっとガイダンスの徹底を希望します。」



それから、僕たちの入学試験には数Ⅲが無かったわけですが、聞くところによりますと、今年も数Ⅲがないということですね。僕は、数Ⅲをやった人にも総合科学部へ大いに来てもらおうべきだと思うんです。というのは、現状のままだと、文科系のコースに優秀な人材は集まるかもしれませんが、理科系の方には、あまりそういったことがなくなるんじゃないかと思うからです。その点、文科系の先生方はどのように考えていらっしゃいますか。」

式部…「その入学試験の取り方については、数Ⅲ云々というだけでなく、色々議論がありましてね。一つには、総合という目標から考えて他方面的な関心とか訓練をもった人を取りたいという事、もう一方では、高校のカリキュラムが、理科系・文科系と分かれていて、また、個人の適性から考えても、理科系的な、あるいは文科系的な人材と分かれるわけですよ。だから、それを十分評価出来る形で入試もやるべきだといった風に、両方あるわけです。だけど今までは、総合といった事を判断の大きなポイントにおいて、まあ、一本化してとってきたわけです。そうすると、文科系・理科系を一本化するという事になるとやはり数Ⅲを課することはできないでしょう。ただ、あなたのおっしゃるような観点も、非常にもっともなので、これは、検討されてゆくでしょう。」

上垣内…「その問題については、高等学校が多様化して文科系・理科系の受験生が、はっきり分かれてきている。だから、五十一年度からは総合科学部としても、一本化できなくなって、それで、数Ⅲまで課することになります。」

学生D…「その場合は、理科系で受けたものは、理科系にしか進めないわけですか。」

上垣内…「さあ、そこは、はっきりしてないわけですね。そこは……………」

式部…「その点は一番難しいんです。まあ、個人の自主的な選択ということになるでしょうか。だから、分けて取ってしまった場合に、色々問題が起こるわけですよ。たとえば、点数のアンバランスとか、入った後での方向転換とかいったようにね。そういう問題の予測は簡単に出来ないし、そういう細かいところまでは、現在ネ……………」

とにかく、特徴を持った学生を取りたいというのが、我々にあるわけですね。総合と言っても、ある所に重点をおいて、意欲をもってやるという人は、こ

れは、将来伸びるんじゃないかと思えますね。そういう点を活かしたい。そうかと言って、また日本の現状では、入試科目が決まったら、それに応じて高校の課目自体が、非常に傾斜するという弱点も、有りますから、かなり難しいです。」

学生D…「またカリキュラムについてなんですけど、環境コースは評判が悪いんです。というのは、結局理学部と大差ないってことなんです。カリキュラムを見ても1~4群が群ごとに完全に独立してるような形で、だから全然関連性がなくて、本当に理学部の各学科に来てる気がして……………。総合化へのビジョンが環境コースにはあるんでしょうか。」

上垣内…「先に申し上げたように、自然科学において、総合化を行なおうとすると、本当に最小限の不可欠なものをやっておかないと、これからの新しい自然科学は成り立たないし、発展しないと思います。たとえば生物を例にとれば、これからの生物は、生命科学にしる人間科学にしる、やはり生物や化学は勿論、数学もいりますし、いろいろな形でそれらを最終的にはまとめなければいけないと思います。今の環境コースの1~4群はネ、極端な表現をすれば、現在の教官が自分の存在場所を主張してできた形のカリキュラムですからね、ある意味ではあなたのおっしゃるような理学部的要素が強いだらうと思うんです。もともと理学部出身の教官でつくったわけですから。しかしですね、あれは決してその中からとれというものではなく、ミニマム・エッセンシャルがこれだけだってことを示そうとしたものです。環境といった自然科学の中で基本的授業科目です。そこで、みなさんの方で、この方向を自分でやりたいと定めると、こうとればちゃんとできるというふうになってる積りです。勿論他コースのものもとれますし……………。しかし評判の悪い点もわかりますし、これから変えるべき点も多々あると思います。

で、一つ聞きたいのは、皆さんの中でいわゆる世間一般の“環境”といった問題をやりたい人が多いですかね。そのへん評判の悪さはどちらの意味から来るんですか。」

学生D…「理学部と変わらない感じからと、もう一つの情報の方が心理学をはじめ文科の科目が入ってるので、文科系をもっとやりたいという理科系希望者を納得させ、総合科学的な感じがするわけで、そちらの方へ進みたいと言う友だち、割りと多いんです。で、人気落ちてるんです。」

荒谷…「情報化時代の今日、学問内容というか情報量というか、明治時代と比較するとおそらく数千倍ですよ。世界中の最先端の研究情報がまさに奔流のように押し寄せているので、個人の能力では的確に処理しきれないのが現状です。しかしながら、研究を推進し、発展させるためには、これらの情報をいかに早く、的確に処理し、把握しなくてはいけないし、苦慮しています。そこで、若い学生諸君にとって大切なことは、文科系であれ理科系であれ、こうした情報に振り回されることなく、科学という人間の知的活動の一つの形態をどのように理解し、人間の行為として意義づけていくかということをもまず考えていただきたい。そうでなければ科学自身の崩壊につながると思います。先程の方が環境科学コースは理学部と同じじゃないかと言われましたが、自然界、生物界の物質・エネルギー転換を対象にした研究も環境科学の重要な柱でありますので、物理、化学、生物、地学など純正科学としての自然科学は基礎的に当然必要となってきます。さらに細分化した量子力学とか熱力学とかがなくしては生体反応を動的にとらえることはできません。そうした意味から基礎的学問内容は当然同じです。ただ、先程も申しましたように、人工生態系を自然生態系にもどし、文化的、社会的環境をも併せ考えた環境設計こそ人間の進化にとって重要な点で、こうした意味から、学際的にアプローチしてゆく面が理学部と大きく異なる点だと思います。」

学生E…「私達は7月に入試があった関係上、第一志望ではないけれど、国際的な総合的な視野をもった現代社会が必要とする人材の育成といった総合科学部の方針に、莫然とした期待をもって入学しました。今、実際に何カ月かを経て、理想と現実との間の大きなギャップが感じられます。その中で自分のやりたい事ははっきり自覚してやっている学生もいるんですが、多くの者がつかみどころのない不安をもったまま学生生活を送っているように思います。

例えば、英会話の授業ですが、あれでは高校の授業と変わりもなく役に立たないような気がするんです。先生方のよく言われる大学においては自分達の努力で学んでいかねばならぬということは、確かにその通りですが、新しい学問追究の学部で開かれる授業ならば、学生達が積極的に取り組んだなら、それなりの手ごたえのくる授業をやりたいと思えます。今英会話を例にとりましたが、他のものにも

同じようなことを感じるんです。」

学生D…「僕は、彼女と同じ英会話の講義に出るんですけども、講義は「英会話」でしょ。だから英会話をやるとみんな期待してきているのですけれど、でも講義の進め方が予備校と変わらないわけですよね。先ずテープレコーダーをきかせて、それをだれかに読ませて先生がかってに英語でそれを説明するんです。生徒がわかるわからないは全然問題にしないです。」

田淵…「語学の授業のあり方について、君らの方から色んな意見や注目を担任の教師にどんどんぶつけてもらいたい。英会話の時間に英語でそれを言うのもいいでしょう。それから、会話にしても3年次まで段階的にカリキュラムを組んでいるので、段階に応じて力をつけて行くことです。一つ言いたいことは、学校の時間だけで語学の力が身につくと考えてはいけません。その何倍かの時間を個人の学習に当てることです。会話なら会話で自分のパターンをつくるためには、LL教室の自由時間を利用する、テレビ、カセットコーダー、ESSもある。英字新聞を、専門書を、小説・随筆を読む、音読し、手で書き、……そういったことで次第に力が蓄積されて行くのだと思います。それら全ての問題について語学の先生方の所へどんどん相談に来て下さい。来年度は「外国語特別演習」が開設されるわけですから大いに鍛えます。これは外国語の方で考えている「言語文化コース」という概念から出たカリキュラムです。外人教師の授業も始まります。LL教室も後期から一教室増える予定ですから。」

式部…「七月に入学したということもあって、言わばノーマルな体制で出発していないということもあって、あまり、こう身につくような食いつきたいようなのがないということなんだろうと思いますけどね。でも、教師の立場からいうだけけれども、講義をよく聞いていたら、かなり、なるほどそうか、というところがいろいろある。それがないとすると、学生の方もおかしいのではないだろうか。だがまた大学というのは大学生の「時期」だと思う。授業もきくが、授業がすべてではない。このぜいたくな時期を利用してね、今まで読んでいない本を読んだり、自由な行動も楽しんだり、余裕をもってやっておくこと。よんでおく本は無数にありますからね。先生なんか相手にしないというのもいいんですよ。本当に、たいしたこといわん先生だなと思ってネ。それ

より私の読んだ本の方がずっといいこと書いてあるネ。それであってほしいと思う。一面では、ボクの授業に感激してほしい(笑)。両方がある。」

式部…「だから形式は別として、原則的に君達が経験した上での問題点を十分に出してもらって検討すべきでしょう。」

司会…「今、色々な面から、カリキュラムのことについて問題になっているわけですが、学生各自にそれに主体的に興味をもたせるためにも、東大教養部のように、カリキュラムにおける具体的な学生参加は、本学部で実現可能でしょうか。」

式部…「東大の場合は合同委員会があるものの硬直化して成案がとぎれてしまったし、こういう例からもわかるように、ある公式に固着してしまっただけでは発展がなくなるということです。だから要するに、例えばこういう座談会のように学生と教官相互の考え方や願望が実質的に生かされるような方式は考えるべきでしょう。ただ生かすといっても、個人だけにあてはまる意見ではだめで、この学部全体に合理的に適していなければ真に『生かす』ことにはなりません。」

司会…「このへんで三迫先生に学生相談室長というお立場から現代の学生の不安とを悩みとかを話していただきたいと思うんですが。」

三迫…「まあ相談室長としての立場から離れて、今の話を聞いて感じたことを一言だけ話そうと思います。それは、こう会を開いて相談する必要のない話題も含まれているようですが、もっと先生方と話をするチャンスを自分で作るのがよい。例えば130人の先生方を順々に回ったっていいでわネエ。自分から話題を作りまして、それをもって5分でも10分でも話をする。まあ先生方の都合もありますが……そういう機会をたくさん作る事によって、研究面とか人生面とかいろんなことを、多くの先生方に、相談室の100%利用はいうまでもないんですが、意見を求める。そういう、ものおじしない態度が、いかにもこの学部の学生であるという意識を強くすると思うわけです。カリキュラムという奴は形式化しまっただけで、そのカリキュラム以外のいろいろな勉強を教わらなくちゃいかなのですよ。そういう事が先生方との個人的接触という面で十分に達成されると思うんです。」

学生F…「僕は質問というより、ただ思っている事を言うんですが、環境科学コースへ行く人は少ない

ですね。それで仲間が少ないということは寂しいんですけれど。なぜ環境へ行く人が少ないかと考えてみると、環境は理科系なんで、数学にしても、物理にしても、綿密な生活を送らねば将来やって行けないという所があると思うんです。そういう生活を送らねばならないということは、その人の生き方を左右するわけで、そういう意味で、時間的にも精神的にもゆったりした生活が送れないことがあると思うんです。総合科学部の場合は多少改善できると思いますが、理科系では、社会構造など社会的なことをなかなか知ることができないというか、要するに、真面目な、おめでたい人間になるのではないかと不安があるんです。各人、好奇心によって学問研究はするんですが……。そういった所、理科系の先生方はどういうふうに？」

上垣内…「私の経験について話しますと、私は高等師範で理科二部を専攻したわけですが、高師は文科系は午後殆んど授業がなく余裕があるわけですね。ところが理科系の我々は午後は毎日物理か化学の実験です。毎日ね。実験をやり乍ら、とくにそのレポートの整理をしながら、文科系の暇なのをうらやましく思ったこともしばしばです。ちょうどあなた方の年頃です。しかし、その頃、加田哲二だったかの「何を読むべきか」といった本があって、その中にあげてある、古典や翻訳小説などかなり読みましたね。

時間的束縛は、自然科学を志した者には、皆さんのジェネレーションから当然受けると思います。そうしないと自然科学の分野では発展についていけないわけですから。総合科学部に入った皆さんの目の前には、興味のある授業科目が、いろいろと用意されており、自由にとれるようなシステムになってい



るのですから、専攻分野の自然科学は勿論のこと、人間的完成を目指す文科的なものも十分補って下さい。やはり忙しいことは十分に覚悟して下さい。」

司会…「最後に、兼田先生にまとめをお願いします。」

兼田…「皆さんの要求がタナボタ式を期待していたんでは、学問はできない。やはり、これから形成して行くものである。創って行くものだということを理解する必要があると思います。総合科学部へ入って来て新しい時代の要求するものが、すぐ得られるんだと期待するのは、あまりにも唐突ではないだろうか。やはり時間のファクターが大事だという事を認識してほしいですね。」

先程、上垣内先生は、リアルコンビネーションが行きづまったんだとおっしゃったんだが、今日、世界も、人類も転換の時代だといわれて、新しいコンビネーションが求められているんです。その理念、方法を創り出そうというのが総合科学部創設の目的ですから、みんな頑張らないといけない。君達の側からは、カリキュラムが非常に問題になる。我々もできるだけことは考えていますが、我々より、特に第1回生である皆さんは、まさに総合科学部のカリキュラムで教育をうけて、学問して出るんですから、皆さんの創ろうという意欲を期待したいですね。だから皆さんの意欲からくる要求については総合科

学部では十分考慮されるはずですよ。それで参加の形式について真剣に考えねばならない。いろいろあるだろうが、話し合いが一番大切だと思います。」

君達は第1志望じゃなかったと言ったが、今年4月、第1志望の学生が入ってくる。先程学生から、ガイダンスが足らなかった、カリキュラムが貧困だということが出ましたが、私達は、君達の意見・要求をまじめに受け止めております。また新しい学生に対する君達の先輩としてのガイダンスが非常に大切だと思います。我々も君達の意見をくみ取って新しい学生にガイダンスしなくちゃならないと思います。……

「まあ、今日は新しい学問体系を協力して作ろうではないかという共同意志を確認すればいいんじゃないかと思います。」

広島大学総合科学部設置の経緯

※ 下線は委員会, 「」は刊行物, ()は発行者, ・は補足説明

44. 2.16 教養部内に教養部改革委員会発足
44. 3.17 「教養部改革案(第一次草案) — 大学再建の方向と教養課程のあり方 —」
(教養部改革委員会)
- ・ 教養部教職員に配布し審議
44. 4. 1 教養部改革委員会を改組し, 将来計画委員会とカリキュラム委員会を発足
- ・ 将来計画委員会: 教養部昇格問題を検討
 - ・ カリキュラム委員会: 全学カリキュラム委員会の素案を審議し, 46年度教養部新カリキュラムを
検討
44. 4.22 教養部内に第二次教養部改革委員会発足
- ・ 教養部改革の具体化と推進
44. 4.23 「教養部改革案(第二次草案) — 一般教育課程のあり方を中心として —」
(教養部改革委員会)
- ・ 学内教職員, 教養部学生に配布し批判と意見聴取
 - ・ 教養部改革委員会案に基づいて44年度生に新カリキュラム採用, 実施
- 44.11.11 広島大学評議会内に将来計画特別委員会を設置
- ・ 大学改革委員会「仮設1」, 教養部改組案を審議し, 教養部の整備・改革について審議
45. 7. 3 広島大学評議会内に一般教育特別委員会発足
45. 7. 8 教養部内に教養部改組特別委員会発足
- ・ 教養部改革委員会案, 大学改革委員会諸提案を討議し, 教養部改組案を検討, 評議会内に一般教育特別委員会が設けられたことに対し教養部の進むべき方向について検討を加えるため設置
45. 9.16 「広島大学教養部改組案(第一次案)」 (広島大学教養部)
- ・ 全学の関係部局, 大学改革委員会に配布, 批判・検討依頼
 1. 一般教育の抜本的改善と充実
 2. 一般教育研究所の設立
 3. 新しい学科の創設による専門課程の設置を主眼とし, これらを実現するため教養部を「教養学部(仮称)」に改組
 - ・ 7学科制(地域文化, 比較文化, 言語文化, 基礎科学, 情報科学, 環境科学, 人間行動)
- 45.10.28 教養部内に第一次学科編成委員会発足
- 45.12.15 将来計画特別委員会の一部として一般教育・教養部問題小委員会を設置
46. 教養部学科編成委員会を解散し, 新学科編成委員会発足
- ・ 教養部改組案(第一次案)による7学科制の他に, 2学科制(基礎科学科, 総合科学科)を検討
46. 3.17 教養部内に教養部改組専門委員会発足
- ・ 各委員会, 合同委員会で教養部改組案(第一次案), 大学改革委員会「仮設1」を比較検討し,

教養部改組案（第二次案）の作成

46. 6. 16 教養部教官会で新学部名について審議
- 提案された学部名：教養学部，一般科学部，総合科学部，広域科学部，広域基礎科学部，科学部
46. 6. 23 新学部名は総合科学部と決定
46. 7. 14 文部省へ調査費を概算要求（総合科学部創設準備費を含む）
46. 9. 20 「広島大学教養部改組案（第二次案）——教養部改革と総合科学部の創設——」
（広島大学教養部）
- 全学，文部省に提示し，検討・批判依頼
 - 1. 総合科学科 1学科，6専攻，76学科目（横断型学科編成）
（基礎文化，地域文化，基礎科学，環境科学，情報行動科学，身体運動科学）
 - 2. 一般教育部を設け一般教育の全学担当
 - 3. 一般教育と専門教育の有機的一体化
46. 11. 10 教養部内に教養部改組推進委員会設置（第二次学科編成委員会を改組）
- （46. 12. 9～46. 12. 22）の間，教養部教官による教養部改組案（第二次案）の各学部での説明会
 - 評議会内の一般教育・教養部問題小委員会における研究討議と併行し教養部改組案（第二次案）に対する学内外からの意見，批判について検討，審議し，教養部改組案（第三次案）の作成
47. 昭和47年度広島大学予算に調査費369.8万円が認められた
47. 4. 19 「広島大学教養部改組案（第三次案）——一般教育課程の改革と総合科学部の創設——」
（広島大学教養部）
- 評議会内の一般教育・教養部問題小委員会に提示
 - 総合科学部の構成：3学科，8研究コース，68学科目
〔地域文化学科（4コース），情報行動科学科（2コース），環境科学科（2コース）〕
 - 一般教育は主として総合科学部が担当
47. 6. 15 新学科委員会および各学科小委員会設置
47. 10. 4 教養部改良委員会設置
- 教養部内に総合科学部設立準備委員会設置（新学科委員会を改組）
- 総合科学部設立推進委員会設置
47. 10. 24 各学部・分校・教養部別に縦割カリキュラム検討専門委員委嘱
（広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会）
- 「教養部改組案」（第三次案）を前提とし，学部分校別に具体的なカリキュラムモデル・プラン作成，教養部と接渉
48. 1. 「一般教育カリキュラム改革試案」（広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会）
- 評議会に提示，全学の討議資料として意見聴取
48. 2. 27 「一般教育における外国語教育改善のために」（広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会，一般教育における外国語教育検討専門委員会）
- 大学における外国語教育の問題点を追求，外国語教育の本質究明
48. 2. 「一般教育課程の改革と総合科学部の創設」（広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会）

- 一般教育・教養部問題についての結論的報告書
- 48. 3. 「一般教育課程の改革と総合科学部の創設」 (広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会, 広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会, 一般教育・教養部問題専門委員会)
 - 第1部, 2部「一般教育課程の改革と総合科学部の創設」に対する各学部の意見聴取
- 48. 3. 9 教養部内の総合科学部設立準備委員会を総合科学部将来計画委員会に改名, 9小委員会を設置
 - カリキュラム, 学生指導, 外国語, 管理運営, 大学院, 整備, 体育系問題小委員会および申請書整理, 連絡広報特別委員会
- 48. 昭和48年度広島大学予算に調査費387.4万円が認められた
- 48. 5. 「一般教育課程の改革と総合科学部の創設」<その2> (広島大学将来計画特別委員会 一般教育・教養部問題小委員会, 広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会, 一般教育・教養部専門委員会)
 - 「一般教育課程の改革と総合科学部の創設」<その2> に対する各部局の意見
 - 「各部局から寄せられた意見について」
- 48. 5. 8 一般教育・教養部問題小委員会は広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会, 一般教育・教養部専門委員会に移行
 - 広島大学将来計画特別委員会設置内規の廃止による
- 48. 6.16 広島大学評議会で総合科学部の設置を昭和49年度概算要求項目とすることを決定
- 48. 8.21 文部省議で, 「広島大学総合科学部」の設置を昭和49年度概算要求項目とすることを決定
- 48.10. 9 広島大学総合科学部創設準備委員会設置
 - 広島大学に広島大学総合科学部創設に関し必要事項を審議
- 48.10.31 「広島大学総合科学部設置計画書」(予備審用)文部省へ提出
 広島大学総合科学部創設準備委員会に次の専門委員会を設置
 - (1) カリキュラム専門委員会; 総合科学部の創設に伴うカリキュラムの諸問題に関し, 必要事項の検討
 - (2) 学生補導専門委員会; 総合科学部の創設に伴う学生補導の諸問題に関し, 必要事項の検討
- 48.12.15 「総合科学部将来計画案」 (教養部将来計画委員会)
 1. 総合科学部設置計画
 2. 言語文化コース増設, 言語センター新設
 3. 体育学部創設
 4. 大学院総合科学研究科構想
 5. 研究施設設置
 6. 広島大学カウンセリング・センター設置
 7. 全学カリキュラム・センター設置
- 49. 1.10 「広島大学総合科学部設置計画書」(本審用)文部省へ提出
- 49. 2.21 大学設置審議会委員広島大学実地視察
- 49. 3.27 広島大学総合科学部将来計画委員会に大学院問題, 外国語問題, 体育系問題, 芸術系問題小委員会を設置
- 49. 6. 7 広島大学総合科学部設置(昭和49年 法律第81号)
- 49.6. 2~12 広島大学総合科学部学生募集
- 49.6.22~23 " 入学試験
- 49. 7. 8 " 入学式(入学者122名)
- 49. 7.11 " 授業開始

新入学生調査

— 昭和49年、7月10日実施 —

学生相談室

総合科学部創設、第1回生入学、オリエンテーション。めまぐるしいスケジュールのなかに、総合科学部新入学生全員を対象として第1回目の実態調査を組み入れることになった。どんな学生が、どんな目的を持って入ってくるのだろうか。それに即応して、新しい学部は何を考え、どんな学校作りをしなければならないか、殊に本年は7月入学という異常な形となっていて、来年以後と、種々の点において違いを持つことになろう。それをなるべく明確にとらえておきたい。

学生相談室は、なにか問題をかかえて来談する学生に、個人的に接触し、助言するのが最も重要な仕事ではあるが、さらに一般的に、全体的に、問題の所在を追求する努力を怠ってはならないであろう。個人の悩みは、全体の悩みと相通ずるものがあり、目の届かぬところ、耳の及ばないところに存在する病根が、一個人に具体化し顕在化することが多いからである。

7月の調査は、初めての試みであるから、できるだけ単純な問にしばることとした。また、記名式の方が望ましいと思ったが、束縛を感じ、自由に書けないこともあろうと思って無記名とした。そして、保健管理センターでも意識調査を行なっているので、重複を避けるように配慮した。

調査結果については、学生相談室の前の掲示板に2ヶ月ぐらい掲示はしたが、見ない人も多いらしいので、ここに再録し、あわせて少しばかり感想をつけ加えてみたい。

回答者数 男89 女15 不明4 計108(在籍学生122)

問1. 大学進学目的

「あなたが大学に進学することにしたのは、どのような目的からですか。」

- (1) 教養を高めるため。
- (2) 専門的な知識・技術を身につけるため。
- (3) 就職を有利にするため。

この3項について、1(全然そのためではない)から、5(まったくそのためだ)まで5段階にわけ

て記入を求めたが、平均値は次のようになった。

- (1) 3.9(男3.8, 女4.1)
- (2) 3.6(男4.0, 女3.5)
- (3) 2.7(男2.9, 女2.7)

調査をしてみないから明らかではないが、工学系統とか医学系統だったら、(2)の項が断然多く4.9ぐらいの平均値になるのではなからうか。

欲を言えば、大学はこの3項目のすべてが重要であり、学生はこの3項目を平等に重視すべきことは言うまでもない。総合科学部の教養重視を理解してくれていることは感謝するが、更に真の教養とは何かについて、十分考えてほしいと思う。

問2. 総合科学部への期待

「あなたは、広島大学総合科学部のどんな点に期待していますか。」

- (1) 自分の専攻したい学問分野が用意されていること。
- (2) 教育内容が総合的で、幅広い人間形成が可能であること。
- (3) 学際領域など、新鮮な内容を持つ学部であること。
- (4) 入学後、学部の内容がわかった後に、専攻する学問分野をきめることができること。
- (5) 自分の希望する進路(就職・進学など)に有利であること。

以上の5項目について、それぞれ、1(全然期待していない)から、5(非常に期待している)までの5段階に、○印をつけてもらった結果、次のような平均値となった。

- (1) 3.4(男3.5 女3.3)
- (2) 3.7(男3.7 女3.8)
- (3) 3.5(男3.5 女3.1)
- (4) 3.0(男3.1 女2.9)
- (5) 2.8(男2.8 女3.1)

問3. 大学院への進学

「あなたは将来、大学院へ進学する希望を持っていますか。」

- (1) はい 男49 女6 計57(52.8%)
- (2) いいえ 男4 女2 計7(6.5%)

(3) まだよく考えていない 男 36 女 7 計 44 (40.6%)

この答は非常に心強いものを感じる。総合科学部は、科学の研究に新しい創造的な意欲を燃やす学徒の集まりでありたい。

問 4. 研究したい学問分野

「あなたは、大学(大学院を含む)でどのような学問分野を研究したいと思っていますか。」

A 人文科学 男 29 女 12 計 41 (56.2%)

- 01 文学関係 計 11 { 文学 3, (外国)語学 6, ドイツ語(学) 1, 言葉に関する分野 1 }
- 02 史学関係 10 { 歴史(学) 5, 国史(学) 2, 東洋史(学) 3 }
- 03 哲学関係 6 { 哲学 1, 心理学 2, 宗教学 2, 仏教学 1 }
- 04 その他 14 { 人文(科学) 2, 文化(学) 1, 地域研究(地域文化) 3, アジア(研究) 2 東南アジア現代思想史 1, 中国研究 1, アジア・アフリカ・南米等の地域研究 1, ヨーロッパ(研究) 1, イギリスの文学と文化 1, ヨーロッパ文化と東洋文化 1 }

B 社会科学 男 32 女 1 計 34 (46.6)

- 07 法学政治学関係 17 { 法(律) 13, 政治学 2, 環境と法 1, 環境と行政 1 }
- 08 商学経済学関係 9 { 経済学 6, 経営学 2, 会計学 1 }
- 09 社会学関係 1 { 文化人類学 1 }
- 10 その他 7 { 社会科学(社会文化) 5, (人間)行動科学 2 }

C 理学 男 21 女 1 計 23 (31.5)

- 13 数学関係 3 { 数学 3 }
- 14 物理学関係 5 { 物理学 5 }

15 化学関係 2 { 化学 1, 高分子化学 1 }

16 生物学関係 2 { 生物学 2 }

19 その他 11 { 理学(理系) 1, 自然(科学) 2, 数学と物理学 1, 地球科学 2, 情報科学 1, 情報行動(科学) 3, 総合的自然科学 1 }

D 工学 男 7 女 1 計 8 (11.0)

- 24 土木建築関係 1 { 都市計画 1 }
- 32 航空工学関係 2 { 航空工学 2 }
- 35 その他 5 { 情報工学 1, 情報処理 1, 環境(科学) 3 }

F 保健 男 3 女 0 計 3 (4.1)

52 医学関係 3 { 精神医学 1, 法医学 2 }

I 教育 男 3 女 0 計 3 (4.1)

69 教育学関係 3 { 教育心理学 1, 人間形成の心理学 1, 異常心理学 1 }

J 芸術 男 0 女 1 計 1 (1.4)

85 音楽関係 1 { 音楽美学 1 }

	男	女	計
のべ有効回答数	94	16	113 (154.8%)
有効回答者数	57 (64.0)	13 (86.7)	73 (67.6%)
「まだよく考えていない」無回答の合計	32 (36.0)	2 (13.3)	35 (32.4%)
N (回収数)	89 (100)	15 (100)	108 (100%)

(回答数に付せられたパーセンテージは、有効回答者数に対する比率)

地域研究、環境科学等、総合的実際的な分野・テーマは、男子 24, 女子 6, 計 31件 (42.5%) も挙げられている。

問 5. 希望する職業

「あなたは、大学(大学院を含む)卒業後、どのような職につきたいと思っていますか。」

	男	女	計	
1. 技術者	5	1	6 (10.0%)	{ プログラマー 1 }
2. 教員・研究者	22	3	27 (45.0)	{ 教員 11, 研究者 16 }
3. 記者	9	0	10 (16.7)	
4. その他の専門的職業	9	0	9 (15.0)	{ 外交官 3, 裁判官 2, ほか }
5. 公務員	9	1	11 (18.3)	{ 公務員 10, 国連職員 1 }

	男	女	計	
6. その他	7	0	7 (11.7)	{ 経営者, 販売従事者等 }
のべ有効回答数	61	5	70 (116.7)	
有効回答者数	52 (58.4)	5 (33.3)	60 (55.6)	
「まだよく考えていない」 無回答の合計	37 (41.6)	10 (66.7)	48 (44.4)	
N	89 (100)	15 (100)	108 (100)	

具体的な職を挙げなかった者が44%, 特に女子では67%もあることは、見のがすことのできない点であろう。職種としては、「研究者」「大学教授」等

を挙げるものが多かった。大学院進学希望者数とも関連して興味深い。

問6. 不安や悩み

「あなたは、これからの学生生活に関して、何か不安や悩みを持っていますか。」

	男	女	計	
1. 修学	9	2	11 (18.9%)	{ 単位のとり方がわからない 6 希望のコースに進めるかどうか 1 }
2. 学部の内容と将来性	9	0	9 (17.0)	{ 総合科学部のあいまいさ 1 総合科学部の空中分解 1 }
3. 志望との齟齬 (進路の変更)	4	1	7 (13.2)	{ 他大学を受験しなおすべきか 2 }
4. 卒業後の進路, 就職	2	1	3 (5.7)	{ 職が見つかるかどうか 1 }
5. 友人・異性	8	2	10 (18.9)	{ 友人が得られるかどうか 3 恋人ができるかどうか 3 }
6. 課外活動	3	0	3 (5.7)	{ 時期的に入部しにくいこと 1 }
7. 健康・体力	3	0	3 (5.7)	
8. 経済生活	3	0	3 (5.7)	
9. 下宿・寮生活	3	0	3 (5.7)	
10 その他	6	1	7 (13.2)	{ 全てが不安 1 大学生活への適応 1 }
のべ有効回答数	50	8	60 (113.2)	
有効回答者数	44	7	53 (49.1)	
「なし」, 無回答の合計	45	8	55 (50.9)	
N	89 (100)	15 (100)	(100)	

1から4までの進路・修学に関する不安・悩みが半数以上を占める。「単位のとり方がわからない」「わかりにくい」という記述は、特に多かった。また、転学部・再受験等、進路の変更を考えている学生も何名かいることがわかった。

さて、調査の問と回答は大略以上の通りであるが、

「まだよく考えていない」という無回答が相当多い。これは真実であろう。この問のなかには、在学4年間に段々煮つめられて、はじめて決定されるものが多いことも確かである。入学の初期における夢、貴いその夢こそ大切にしなければならぬ。と同時に、不安なことではできるだけ早く解決していかなくてはならないであろう。

私 の 夢

大 番 卓 司

千田町キャンパスを案内するとき一番手っ取り早い方法は理学部前の三叉路に立つことです。三叉路に立つと正門、南門、北門がひと目でみられ、各門の外には自動車が引切り無しにはしっているので構外であることがわかります。そして、このキャンパス内に広大な教職員、学生の約半数がおり、総合科学部の建物に約4,000人の学生がおることを説明して案内はほぼ終了します。

このように狭いウツワの中に人と施設がひしめきあっているのが広大な現状です。

私は現在まで十指に余るほどの引越しをしておりますが、引越しごとに不安になったことは、雑多な荷物が家の中におさまらるだろうかということでした。広大な移転は私の引越しとはわけが違いますが、もしも、移転するにあたり、千田町キャンパスと同じ広さを移転先の西条に求めて、現在と同じ人と施設をおさめようとした場合、それは到底不可能なことと思います。特に総合科学部の現状は過密の見本といえましょう。

そこで、狭い狭いとばかり思っていないでときには西条の地へ思いを馳せて、自由気儘な夢をえがいてみたいと思います。

遠くから見るキャンパスの起伏は緑の線となり、緑の中に点在する建物は大自然の添景をなし、サロンプラスを貼ったような山肌削り跡は見えません。門に近づくと、広い駐車場があり、幹線通路以外の自動車乗入は制限されております。この制限は、云うまでもなく自然保護と、教育、研究の環境を騒音から護ることにあります。車をおりと歩くことから始まります。乗り捨てのできる構内自転車もありますが、大自然の中をこせこせと急ぐことはありません。自然を満喫するゆとりが身につく、また或る者はフェニックス駅伝のために足腰をきたえておくためにも大いに歩きます。

これからが私の業務における、私の夢ですが、門を入ると正面に6階建ての学生生活センターがあり、1階と2階は裾をひろげたように横にのびております。この裾の部分がセンターの特色となっているわけで、学部ごとのコーナーになっております。総合

科学部のコーナーに入ると学生控室があり、室内には机、椅子がゆったりと配置され、ロッカーに私物をおき、新聞を読み、友達と談笑し、掲示を見ます。壁には絵画や写真が常時展示され、ときには傑作な個展も開催されます。掲示物は壁の一隅にセンスよく掲示されており掲示板の全面を独占するようなことはしません。学生控室の突き当りに事務の窓口があります。窓口には顔なじみの兄貴分や姉貴分が学生諸君を待っております。この窓口にいる兄貴、姉貴達は学生が入学したときから卒業まで一貫して担当することになっており、この期間にもたれた信頼関係は永久に続けられることとなるでしょう。

現在の事務の機構では業種ごとに分割した組織になっておりますが、センターの窓口に関り学部ごとに分割し、入学年次ごとに卒業まで分担します。この組織では、窓口には多数の職員を必要としますが、学部分散型が集中方式にかわり、また機械化による省力がすすめられるので生きた言葉で学生と対応することができます。職員も窓口に出るには、今までのような一業種の専門家では役に立ちません。最低のところ、現在の学務、厚生、補導業務に精通していなければなりません。このように学生は一人の職員でもって事が足り、職員ひとりひとは学年なり学科を責任をもって担当するわけです。

2階へ上りますと、1階と同じように学部コーナーがあり、その他に医療コーナー、相談コーナーがあります。

3階に行きますと、学部コーナーと違って、学生諸君には直接の関係を持たない業種ごとに分割した組織をもつ事務室になっております。

4階は資料室、資料はすべて電算機により処理され、医療、相談業務にも大いに活用されます。その他の階には大小の会議室や職員の資質を高めるための研修室などが設けられており、教養講座も年何回か開催されます。

以上紙数の関係で簡単に夢をえがいてみましたが、緑に囲まれ庭園をのぞむ学生研究室、西条の町を見下ろす課外活動の施設等、夢は西条の天空を舞って

おります。夢には公害はともないません。口に出すと口害になるかも知れませんが、他人に害をおよぼ

さない夢を私有財産として生涯追っていききたいものです。
(厚生補導係長)

総合科学部生のプロフィール

…………… (女性特集) ……………

さて、第1期総合科学部にはどんなオンナのコがいるんでしょうね。学部のデビューを飾る花々(?)たちに、蜜蜂記者がズバリ直撃インタビュー。その答えっぷりに感じる、あなたの期待・不安や如何に……………。

＊ 名前 出身県 通称

1. 希望のコースと、そこでどんな研究がしてみたいですか。
2. 今一番関心のある事は何ですか。
3. あなたの好きなタイプの男性は。
4. どんな場所でロマンを求めますか。
5. あなた自身を語って下さい。
6. 流行についてどう思われますか。
7. 現代の若者に欠けている点をあげて下さい。
8. 読書傾向と好きな本の名を挙げて下さい。
9. あなたのモットーは何ですか。
10. 大学へ来て、友人観に変化がありましたか。

池田 美津子 広島県 (なし)

1. 地域文化のアジア 中国か東南アジアを総合的にやりたい。
2. 旅行に行きたい。
3. やりたい事を精一杯やっている人。
4. 山に登ってねころんで、ポケーッと青空を見る時。
5. 今、自分が変っている様に思える。今までは、自分が下らないと思っていたが、それほどではないように思ってきた。
6. 着ていて一番楽なのが良い。
7. 真剣さが欠けている。
8. 乱読、邪宗門。
9. 自分に正直に生きる。
10. いろいろな人がいて、新鮮な感じを受ける。自分も変ったみたい……………。

大井戸 朋子 香川県 (なし)

1. 地域文化コース ヨーロッパ研究
2. 人生の楽しい過ごし方です。
3. 自分の欠点を知っていてやさしい人。
4. 冬の散歩道、レンゲ畑
5. 理想に走り過ぎて現実を見つめることができないダメな人間です。
6. 一般的になり、お金があれば取り入れます。
7. 生きがいがないのではないのでしょうか。
8. 外国の小説、トニオクレーゲル/トーマン・マン
9. なし
10. 大学の方がサッパリして free な感じ です。

小川 和子 香川県 (なし)

1. 環境科学コース、片寄らずにやりたい。
2. 大学生活をいかに有意義に過ごすかです。
3. 寛容な人
4. 自然に囲まれた静かな公園です。
5. 真面目だと言われますけど、あちこちに気が散り、真面目な方ではないと思います。
6. 追い過ぎると後で虚しい。装う事が本質ではないと思う。
7. ねばりと忍耐強さ。
8. 文庫シリーズ 別に好きな本はない。
9. たたけよ、さらば開かれん。
10. 求める友達といえる人が増えた。

大下 玲子 山口県 (なし)

1. 情報 漠然と数理統計がやりたい。
2. ジュリー!!
3. 優しくて男らしい人
4. 一人で物思いにふけている時、特に海
5. 消極的の一語につきます。
6. ある程度をとり入れたいが、最先端を行きたくはない。

7. 根性
8. 北杜夫, 遠藤周作 「検家の人々」
9. 人間らしく生きたい。
10. いろんな個性の人とつき合ってみるべきである。

垣田久美 広島県 (なし)

1. 地域文化
2. 如何にしたら1日を24時間+αにして使えるか。
3. 優しく、思いやりがあり、頭が切れる人
4. 夕焼けがきれいに見える所。
5. 日なたと日陰が、半々ぐらいで育ったひねた朝顔みたいなもの。
6. いいと思うが、着る勇気がありません。
7. 行動力と他人に対する思いやり。
8. 推理小説・SF・怪奇小説・児童書、エラリーニクィーンズの「Yの悲劇」
9. なし。
10. 別に変わりませんでした。

嶋田千恵子 三重県 (シマちゃん)

1. 地域文化のアジア(中国), 特に中国の文化・思想
2. 下宿生活
3. 郷ひろみみたいな人がいたら、すぐ結婚したい。
4. 伊勢神宮の外宮の勾玉池
5. 表面的には柔く、大人しそうだが真は強情です。
6. 自分の好みに合っていればよいです。
7. 男らしさと女らしさ
8. ファニィーヒル
9. 努力する者は、勝つ権利がある。
10. 高校時代はいつも一緒にいるのが友達だったけれど、今はお互いに尊敬しつつ、お互いの行動を認めるのが友人だと思う。

清水冬絵 新潟県 (フッコ)

1. 未定
2. 瞬時に於ける人間の行動、目に見えぬ物に抑圧された人間の底知れぬ精神的苦闘。
3. 面白い人が好きです。
4. ロマン?
5. 太っていることに悩んでいる乙女です。
6. ロングスカートが着れたらいいです。

7. 苦労とか忍耐
8. 「星の王子さま」「モゴール探険記」ピアスやスウィフトは人物に興味あり、周五郎は大好き、最近の本多勝一などに。
9. The sun is always shining behind the clouds — ロングフェロ —
10. 面白い人間に出会いたいなあ

菅原純子 佐賀県 (なし)

1. 地域文化 日本史をやりたい。
2. 本です。
3. 誠実な人。
4. バスや汽車の窓から外を見ている時です。
5. 気まぐれなのです。
6. 自分がいいと思わない時は、従わない。
7. 自分の意見のはっきりしたものを持っていない。
8. 歴史小説
9. 打ち込めるものを持ちたい。
10. 何か高校時代は、ある程度小さい頃から知っていたし、地域性があったし、その人の育った環境の一部がわかってて付き合っているの、それで自分もなにか過去とは違った自分を見つけ出せるのではないかと思う。

武田由美 広島県 (タケッコ)

1. 環境もしくは情報です。
2. お金もうけ。
3. スポーツマンがいいです。
4. 海
5. のんびりやで遅刻魔です。そして心はやさしい女の子でロマンチストです。
6. シックな感じがいいんですね。
7. 勇気が欠けていると思います。
8. 小説と自然科学です。
9. 初心忘るべからず。
10. 書くほどの変化はありません。

館利恵 富山県 (しょうがくせい)

1. 情報行動コース 心理学をやりたいです。
2. 読書かな?
3. やさしくて尊敬できる人
4. 宇宙か人の心の中。

5. 笑いじょうごで素直な乙女です。
6. 自分に以合えば取り入れる。
7. 克己心忍耐力
8. 乱読や生物関係 「善人は若死にをする」大西赤人
9. 克己 自分に打ちかつ
10. 男の子とはこんな無邪気なものとは大学へ来て初めて知りました。

津崎 泰代 岡山県 (なし)

1. 地域文化の英米
2. 音楽 エアチェック
3. 男らしく、行動力があって頼り甲斐のある人。
4. 昔の瀬戸内海
5. 全く矛盾した性格が、共存していて、嘆いている乙女です。
6. 底流は同じだと思うから、少々変っても、どうってことはない。
7. 自分なりの意見をもっていない。
8. 児童文学・推理小説
9. マイウェイの文句ではないけれど、自分のやり方で、少しづつでもいいから、やっていきたい。
10. 大学では、友達の下宿へ泊って、一晩中語りあかして友情を深めることがあります、友情そのものに変化はありません。

西尾 順子 佐賀県 (なし)

1. 社会文化
2. 四畳半、炊事場付、日当りの良い、閑静な下宿
3. 大人で包容力があって、クールで優しく、容姿端麗な人。
4. 川風に吹かれている時に……
5. 優しく、女らしくて、おっちょこちょいだけど、落ち着いてみえて世界一素敵女性です。
6. 人と反対の事をしてみたい。
7. 質実剛健
8. 日本文学 「我輩は猫である」
9. 献身
10. (下らない奴がゴロゴロしている。)これは嘘です。

林 香代子 広島県 (カコ)

1. 今だ定まらず。

2. 人間 又皆どんな事に関心があるか関心があるな。
3. 大きな人(体格ではありません)がいいです。
4. 「求めたい」と思った時に聞いて下さい。
5. なんとも言えません。
6. ファッションについて、自信のある人ってうらやましいな。
7. 「恥」をかくことをこわがっている。(羞恥心は捨てた方がいいな。)
8. 「巴里に死す」「春の谷間」「ライ麦畑でつかまえて」
9. 己に徹して己のために生きる。事を起こした後で振り返るな。
10. もっと女子が多ければいいな。もっともっと友達が欲しい。でも友人関係をうまく続けることは、むづかしいと思いました。ユニークな人っていいですね。

原田 清子 広島県 (キョちゃん)

1. 情報行動
2. 食糧問題
3. 優しければ良い。
4. 田舎
5. 気が強い反面、涙もろい人間です。
6. オーソドックスで、色は地味なものがよい。
7. 希望を失っています。
8. 乱読 「星の王子様」「沈黙」
9. 何事も成せば成る。
10. 環境が違ってるし、大学では自分から求めなければ、友人はできないみたい。

村瀬 紀美 京都府 (キミ)

1. 未定 文学がやりたいです。
2. フィーリングです。
3. 自分をよく理解してくれる反面悪いところは悪いとはっきり言ってくれる人。
4. キャンパスがいいです。
5. 片寄っていて、自分の思ったことを他人がしてないとはらがたつが、自分は干渉されたくないですね。
6. その人にあっていればよいです。
7. 主体性が欠けているんじゃないですか。
8. 乱読 「20才の原点」
9. 自分を欺きたくない。
10. 全国的になったことより、自分の視野が広がりました。

TOWARD A CULTURAL STUDIES PROGRAM

Any thoughts which I might present regarding the nature of an Area Studies program will have to be just that: thoughts, that is, reflections based on rather personal narrow experience, certainly not theories worked out carefully in relation to other theories.

It would seem to me, however, in first thinking of an Area Studies Program that the very term is something of a misnomer. In such programs as I have been involved with, we have sought to examine a "culture" rather than an "area." The attempt has always been to discover the general from the particular, to grasp the essence of a culture by examining its politics, economics, geography, philosophy, history, psychology, sociology, literature, art, folk materials. Such an attempt is based, of course, on the understanding that facts, events, people, creative works do not exist in isolation, but in relationship to each other and as a totality are expressive of a given culture. Thus a history course, taught in what I would like to call a Cultural Studies Program, does not deal only with the facts of a treaty, or a literature course only with the peculiarities of a style, or a geography course only with the variety of soil stratum; the concern in a Cultural Studies Program, I should think, would be to demonstrate how treaties, style, and soil either reflect or shape a given culture. To teach a course in a Cultural Studies Program such as I am perhaps idealistically describing, the instructor has always to be asking himself how and why any one fact, event, person, creative work is peculiar to a particular culture.

It is indeed legitimate to wonder how such a matter can be ascertained, and my responses are perhaps grossly oversimplified. First, however, I think it is most obviously possible to recognize representative features of a culture through comparison with other cultures. America, influenced by England, is different from England, just as England is different from America; Japan, influenced by China, is different from China, just as China is different from Japan. Secondly, the representative features of a culture can be recognized statistically. Accumulated information about eating habits, for example, or novel plots or attitudes toward another race should make it possible to distinguish a particular cultural behavioral pattern. And lastly, as indicated above, it would seem to me that the representative features of a culture can only be discovered through a fully interdisciplinary study. This implies that not only the traditionally acceptable academic subjects would be examined in relationship to one another but that they would be studied in conjunction with folk materials and popular culture, e.g., literature would be set alongside comic books, religious sculpture alongside farm implements, political philosophy alongside superstitions. A Cultural Studies Program, being essentially a discipline demanding this kind of constant cross-fertilization, makes it impossible for either its instructors or its students to be limited in vision or to stagnate.

Let me share with you some of my experiences with cultural studies programs. My first involvement in such a program was at the University of Michigan where freshman honors students were required to take, instead of the usual English composition course, a two-semester, four-hour weekly, course in the so-called Great Books. These Great Books, with the exception of Virgil's *Aeneid* taught at the conclusion of the course, were the works of Greek dramatists, historians, philosophers, and of course Homer. Teaching several sections of the course, I found I was also a principal learner in the course. I came to realize that the Greeks had indeed asked

the central questions upon which Western culture at large has come to be based. I also came to realize that the problems of 5th-century Greece were quite analogous to the problems of America in the 1960's, that the rise and fall of Greece at the time of the Peloponnesian War could be seen as parallel to the rise and fall of America at the time of the Viet Nam War.

More recently, as a result of my interest in Black American literature, I have been drawn into the African Studies Program at the University of Kansas. Aware of the tragic fact that both black and white Americans, due to prejudicial and archaic teaching materials and instruction at the secondary school levels, have a minimal knowledge or appreciation for the importance of Afro-American history and culture in the formation of American culture, in teaching Black American literature, I have had of necessity to familiarize myself with this history and culture in detail. In teaching almost any Afro-American novel, it has been mandatory for me to become acquainted, for example, with events indicating the persistent existence of Black Nationalist Movements, with the rich double entendres and ritual speech patterns of Black English, with the varieties of black music. The African Studies Program at Kansas is, however, not limited to Afro-American Studies; it is a program which seeks to examine the entire African diaspora, that is, the influence of African peoples in all parts of the globe. Other interdisciplinary programs—though not full departments—which have been developed at Kansas which might be of interest have been in environment, in women, in a social class, in movements such as Peace or Revolution, in a time period such as the Renaissance or the 19th Century, in urban life—an entire course having recently been given on the City of London.

The dangers of cultural studies programs would seem evident; moving away from a race of specialists and factualists, such programs can move toward the creation of a race of generalists and abstractionists, whose knowledge is so diffuse as to be neither perceptive nor persuasive nor useful. I can see only one solution to this problem in view of the fact that most of us cannot be universal geniuses as Goethe, da Vinci, or Soseki were, and that is that while recognizing multiple relationships among disciplines regarding a particular culture, we nevertheless continue to ground ourselves in a particular discipline. I can only recommend that those of us in cultural studies try to see widely through the focus of our own beloved, special study. Doing so and coming thus to be able to perceive the outlines a given culture, we might be able to perceive the outlines of ourselves as human beings.

Elizabeth Schultz,
Fulbright Lecturer
Fall, 1973—4
University of Hiroshima;
Associate Professor,
on leave-of-absence from
the University of Kansas

回顧と期待

佐々木 右左

私は定年退職の日を目前にひかえ、間もなく静かに消え去っていく老数学教師である。生れついで文章べたであるが、広報委員長のたつての御要望にこたえ、止むを得ず筆を取ることにした。

まず、私が若かりし日に数名の学友と共に読んだ数学書の思い出について、次に之に関連して、私の数学に対して抱いている考えを述べ、最後に総合科学部に寄せる夢と期待について書くことにする。学生諸君にいささかでも参考になれば、望外の幸せである。

1. 輪読会の思い出

今から40数年前、私が高等師範学校の3年生(今の大学2年生に当る年令)であった頃の事である。同級生の間に語学の勉強をも兼ねて数学の原書を輪読しようという話が持ち上った。これに同調する数名が何を讀もうかと色々話し合った。英語の原書をテキストにして習ってはいたものの、専門的な数学を始めばかりの私達では、何を讀むのがよいか決心をつけかねた。困り果てた挙句、数学の教室に某先生を訪ねて御相談することにした。同先生は大学を卒業して間もない若い方で、兄貴か先輩のように気楽にお話しできる人であった。それ迄にも何回かお宅へお邪魔して、お話を伺ったり、御馳走になったりしていたお方である。

さて、私達の申し出に対して、しばらくお考えになった先生が、書棚から1冊のドイツ語の本を取り出して「この本は観点が非常に漸新ですが、扱っている内容は初等幾何学ですから、君達にでも十分読みこなせるでしょう。」と云って推薦して下さった。それがドイツの数学者ヒルベルトの著書

Grundlagen der Geometrie(幾何学基礎論)であった。

当時は洋書を扱っている書店は広島に一軒もなく、また今のように複写する方法も無かったので、それを拝借すると共に、文理科大学の数学教室からも1冊借り出した。この2冊を数名で廻し読みしながら、辞書と首引きで苦勞しつつ輪読を始めた。先生の云われた通り、著者の観点の新しさなどは深く理解し得べくもなかった。しかし二千年以上も昔ギリシャ

の数学者ユークリッドが著した『幾何学原論』の現代的な再構成を試み、完全な公理系を作り上げたもので、周到綿密な配慮の下に理路整然と議論が展開されていた。その点が私達を魅了したのか、苦心しつつも深い感銘を覚えながら約1年間もこの会が続いた。今思い出してみても実に貴重な体験であったと痛感すると共に、この名著を推薦して下さった恩師に深く感謝したい気持ちで一杯である。

吉田洋一・赤撰也共著『数学序説』第6章数学とは何か — ヒルベルトの公理主義 — には上記著書の内容の概略、著作の動機や歴史的な背景が面白いエピソードをはさみながら、流れるような名文で紹介してある。興味のある人は参照されるがよからう。

2. 数学に対する考え方

吉田・赤の両氏は上述の本の中で、ヒルベルトの数学に対する考え方を次のように要約している。『彼によれば、数学は、現象世界との対応におけるその真理性を追求するものではない。それはただ、単に“矛盾を生じない、”という条件のみを要求された“仮定、”から、形式的に結論を導いてゆく“抽象理論、”の建設をもってその責務とし、それ以外になんらの目的をも持たないものであるという』。

この数学観は公理主義あるいは形式主義と呼ばれ、今世紀の数学界に絶大な影響を与え抽象数学の飛躍的發展をもたらす原動力になった。それと共に抽象化の当然の帰結として、その応用範囲が極めて広範になって来た。従来のように、精密科学、決定論的対象に限定されることなく、新しく生命科学、情報科学、経済理論や生産管理など人間行動に関係する諸分野にまで広く応用されるようになってきている現状である。

上記の要約は、ともすれば数学は所詮われわれの日常生活と全く遊離した、いわば論理の遊びに過ぎないのではないか、という誤解を産む恐れが無いとは云えない。しかし、数学はその生成発展の跡を長い目で眺めてみると、人類の日常生活や自然・社会現象と密接に結びついた所から生れ出たものであることがわかる。蓄積された数多の情報 — 人間の知恵 — を集大成して、一つの理論体系を作り上げる

科学的方法の一つとして、数学が果す役割を純粋数学の立場から、極めて明快に述べたのが上記の要約であると私は考える。

話が少しくどくなるかも知れないが、敢えて学生諸君も周知の数学分野の生成発展の跡をたどってみよう。

古代エジプトで、ナイル河の氾濫の後、土地を復旧する必要から測量が行なわれた。この測地測量という実用上の目的から図形の性質について、長い年月のうちに数多くの知識が次第に集積された。ギリシャ時代までに得られた断片的な諸情報を集大成し、これを一つの理論的な体系にまとめ上げたのが前にも触れたユークリッドの幾何学原論であった。

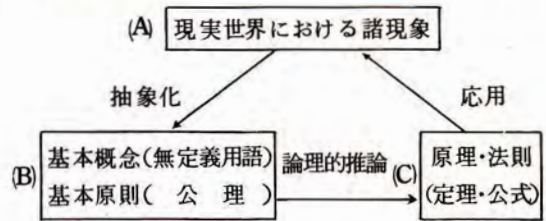
次に確率論の発生は、17世紀に哲学者バスカルと数学者フェルマーとの間の往復文書に出てくるカルタ遊びに関する数学的な問題に端を発し、その後多くの数学者の手を経て次第にその内容が豊富になり、1812年に数学者ラプラスによって古典確率論が集大成された。そして自然科学や社会科学にも応用されるようになった。しかし、1933年公理主義的立場に立つコロモゴロフの著書『確率論の基礎概念』が出版されて始めて確率論に確固たる基礎が与えられた。そして、確率過程論や数理統計学に広く応用されている。

微積分の創始者はニュートンおよびライブニッツであると云われていることは周知の通りである。しかし、積分法の考えの起源は遠くギリシャのアルキメデスの「しぼり出し法」にまでさかのぼる。これは特殊な図形の面積や立体の体積を求めるという極めて具体的な問題を解くために工夫されたものである。

微分法も前出のフェルマーやニュートンの恩師バローらが、曲線に接線を引くという具体的な問題解決の方法として考えていたものが起源になった。ニュートンがこれらを発展させ、体系化し、それを使って物体の運動の理論を建設したのが名著『自然哲学の数学的原理』である。そして今世紀初頭に相対性理論や量子力学が現われるまでは、まさしくこの理論——いわゆるニュートン力学——が物理学の世界を支配したのである。

このように考えていると、数学は決して論理の遊びではなく、現実世界の諸現象の解明に、その生成の起原をもつことがわかるであろう。勿論、数学内部の問題解明に起原をもつ分野も少なくない。非ユークリッド幾何学の発見などその好例の1つである。

このように考えてみると、数学の生成発展の跡を、極めて単純化して図式化すれば、次のようになるのではなからうか。



まず、(A)には自然・社会・生命・心理の諸現象がすべて含まれる。(また、前述の通り、数学内部の諸問題をも含むものとする)。次に、(A)から探求しようとする1つの現象あるいは之と類似・関連の深い現象群を選定する。そして、これらの現象群から、それを支配する最も基本的な概念と原則を抽出する。数学者は前者を無定義の用語として、後者をこれらの用語の関係を規定する仮定と考え、(B)を1つの数学分野の公理系という。之に対して応用を主眼とする人達は(B)を研究対象とする現象の数学的モデルとよぶ。

公理系(B)から専ら論理的推論によって(勿論、鋭い直観力や深い洞察力によって導かれながら)、(C)定理や公式を導いて行って理論体系を建設するのが、ヒルベルトの主唱する抽象数学の責務である。

次に、(C)の結果を(A)の現実世界に適用することによって、所期の現象を解明して行く。ところが公理系の選び方によっては、解明できない現象が観測されるような事態が起こる。そんな時には、公理系を修正したり、全く新しい観点から公理系を組み直して、新理論を構成し、所期の現象の解明に当る。

ごく大まかに云って、 $(A) \Rightarrow (B) \Rightarrow (C) \Rightarrow (A) \Rightarrow (B) \Rightarrow \dots$ というように、らせん階段を廻りながら上へ上へと昇って行く。このようにして、数学や諸科学・技術が生成発展している。私にはそう思えて仕方がない。

2千年以上の歴史をもつ数学には、先人達の貴重な文化遺産として、豊富な内容をもつ諸分野が現存している。したがって、(A)から(B)への抽象化を上手にやって、うまく数学的モデルを作れば、直ちに既成の数学を利用して、所期の現象解明に役立てることが出来る。その意味でも、現存の数学を深く理解し、発展・深化させる事が是非必要である。既成の数学が無い時には、我々の手で新数学を開拓し

なければならない。その際に、手本になるのが現在の数学である。いずれにしても、基礎的な数学の内容の深い理解とその考え方の本質をつかむことが極めて重要であると主張したいが、私の我田引水だろうか。

3. 総合科学部に寄せる期待と夢

サイバネティクスという学際領域の分野がある。これは数学者ウィナーが神経生理学者ローゼンブリュートの一派と、主として科学方法論に関する10年余に及ぶ共同研究の結果、開発した科学の新分野である。彼が見事な統一をもたらした領域は自動制御・情報および通信理論・統計的手法・電子計算機と神経系・心理学・言語学、更に社会現象をも含む広大な分野である。彼によるサイバネティクスの定義は次の通りである：我々の状況に関する2つの変量があるものとして、その一方は我々に制御できないもの、他方は我々に調節できるものとする。そのとき制御できない変量の過去から現在に至る迄の値に基づいて、調節できる変量の値を適当に定め、我々に最も都合のよい状況をもたらせたい。それを達成する方法がサイバネティクスに外ならない。船を運航する際、海流や風向が今まで移り変ってきた模様によって舵をうまく取り、予定コースに最も近い航路をとるようにすること——これがまさにその一例になっている。

この理論を公刊したのが、『サイバネティクス—動物と機械における制御と通信—』（1948年初版、1961年第2版）である。

同書の池原止戈夫氏外による訳書を数年前、医学部の新進気鋭の生理学者である某先生の応援を得て、学生と一緒に読んだことがある。細部については理解できない部分も少なくなかったが、思想的には多くの貴重な示唆が与えられたので、序章の一部を抜粋しよう。

“すでに確立された科学の諸分野の間に誰からも見捨てられている無人地帯こそ、これから稔り豊かに発展する見込みのある土地である。・・・今日では、科学の分野は余りにも細分化し過ぎた。今や単に自分は数学者だとか、物理学者だとか、生物学者だとか云える学者は殆んど居ない。今日の学者は位相数学者であったり、音響物理学者であったり、甲虫類昆虫学者であったりするのである。この人達は、その専門分野については、極めて深い学識をもっている。しかし多くの場合、ちょっと離れた分野の話になると、それは三部屋先の同僚の専門であって、

これに興味をもつのは、他人の縄張りを不当に荒すことのように考えたりするのである。

ところが、これ程に専門化した分野も絶えず拡がり、新しい領域を侵していく。その結果、純粋数学・統計学・電気工学・神経生理学の各方面からの研究がそれぞれ独立に行われ、同じことにそれぞれの部門で別々の名前がつけられている。そして、重要な研究成果が三重にも四重にもまとめ上げられている。かと思うと、ある部門では古典的成果として周知の結果が、他の部門では余り知られずに研究がおこなわれているような有様である。

科学のこういう境界領域こそ、有能な研究者に最ものみり豊かな好機を与えるものであるが、このような領域の探求は、集団攻撃とか分業という、一般に使われている研究方法だけではどうにもならない。……それは、一つの部門の専門家でありながら同時に隣りの部門にも透徹した理解力をもつ科学者たちのチームによって始めて成功する。すなわち、全員が共同研究に参加して、互いに他分野の考え方の習慣・特質を知り、同僚が新しい提案をするときには、それが完全に整った形で表現される前に、その真意を汲み取り得るような科学者のチームでなければならない。数学者が、生理学の実験をやりとげる腕前をもっている必要はないが、それを理解・批判し、かつ示唆し得る能力をもたなければならない。生理学者は数学の定理を証明できる必要はないが、その生理学上の意義を把握し、数学者に考えてほしい問題を話せるようであればならない。何年もの間、我々はこれらの科学の未開拓領域の一つを共同研究するグループを夢みてきた。このグループに属する人達は一行政官の部下として組織されるのではなくて、その領域を全体として理解し、その理解によって互いに力づけたいという精神的な欲求によって固く結び着いたものでなければならない。”余りに引用が長くなるので、この辺で止めたいが、諸君は之からどんな示唆を与えられ、何を学び取るだろうか。

私自身は彼の主張に強く共鳴し、数年前から、経済政策を専攻する政経学部の2名の先生、工学部からは新進の経営システム工学者、わが学部から情報統計学、計画数学を専攻する3教官が加わって、6名の者が殆んど毎週火曜日の午後一堂に会して、共通の関心と興味が持てるような問題について、報告し討議し合って今日に至った。ある時は、ソ連の生産計画立案の機構について経済学者が自身の研究成果の一部を発表し、ある時は部門別制を採用してい

る我国のある大企業の生産計画の多段決定法に関するシステム工学者の報告がある。すると、直ちに両者の比較検討が話題の中心になる。このようにして、厚い学部の壁を破って参集し、数年間も続いたこの共同研究会は、やがて去り行く私にとって、誠に楽しくも貴重な思い出として永く心に残るであろう。メンバー各位に深甚な謝意を捧げたい気持で一杯である。

以上のような実験の体験をもとに、私はこの学部の将来に大きな夢と期待を抱いている。情報科学とその技術進歩によって、地球の片隅で起った事件が宇宙中継で同時に世界中の人達に知らされるような情報化社会の時代になった。その為、世界は一つという考えが人々の間に広がったことは喜ばしい現象である。しかし、現実の社会には、利害の対立、感情のもつれがあり、そこでは駆引、交渉、結託、利益配分などの諸行動が行われている。技術開発が我々に利便をもたらすと同時に、自然環境の破壊・公害の発生・人心の退廃という形で人類に手痛いしっぺ返しをする。このような冷厳な現実をはっきりとふまえながら、人類と大自然を含めて、1つの大システムと見なすとき、これにどんな制御機構を附加し、如何なる方策を取れば、広島・長崎の過ちを繰り返すことなく、生きとし生けるもの全てがバランスを保ちつつ最も好ましい状態になって行けるのか。この現在人類が直面している最重要課題に、わが学部の教官、学生が一致協力して取りくんでいく。それが私のこの学部に寄せている夢であり、期待であ

る。この道は極めて険しく且つ遠い。しかし、各コース、講座がその特徴を生かした共同研究チームを組み、更に必要ならコースにこだわらず、学部の壁をものりこえたチームを作り、それぞれ異なった視点から地についた息永い研究を推進して行く。そうすれば、ここに新しい学問体系が樹立されるに違いないと私は確信している。いつの時代にも科学の大きな転回や飛躍的な進歩が現われる前には、必ず之を待望する社会の要求と転換を予見させるような胎動期が先行していた。現在はまさに、そのような時期だと思われるからである。

学生諸君に、私の体験から次の2点をとくにおすすめしたい。第1点は感受性の強い年若いうちに、一流の学者が書いた名著を読むことである。既に、そのような企画をもつグループもあるやに聞か、是非とも実行に移すことをすすめたい。第2点は、幅広い識見をもつような努力を続けると同時に、学年進行に伴なって自分が最も興味をもち、得意とする分野を見出し、そこに精魂を傾けて研究する態度を身につけてほしいことである。単なる知識の寄せ集めでは、到底新しい学問体系の創造に貢献できないからである。

史上初めて原爆の洗礼を受けた広島に、世界で最初の総合科学部が創設された。原爆の惨事を再び繰り返させないような世界を作り上げる総合的な新科学体系が、この学部を中心に創造されていく事を念願しつつ筆を擱くことにする。

(情報行動基礎研究)

総合科学部創設記念式典

< 挨拶 >



本日は、お忙しい中をお集まり頂き心より厚くお礼申し上げます。

日本で最初の総合科学部、つまりリベラルアーツ・アンド・サイエンス・カレッジであるという意味におきましても、そして21世紀の学問を目指すところの新しい大学で

あるという意味におきましても日本の歴史に残るで

(総合科学部長 今堀誠二)

あろう、そういう新しい学部の発足を今日お祝いできることになったことを、本日ここにご列席いただいている皆様方の心からのお力添えの賜でありまして責任者として心より厚く御礼申し上げる次第でございます。

今日は難しいことは取止めまして、一つ気持よく広島高等学校以来の伝統というものを新しい時代に生かす、そういう学部の発足を皆様方と共に祝いして頂くということを私としても大変に光栄に感じ、またうれしく思っている次第であります。

御来学いただいた皆様方はもとより、この大きな

仕事にいろいろお力添え頂いた方々に心よりお礼を申し上げる次第でございます。

＜祝 辞＞



本日、総合科学部創設記念式典にお招き頂きましてお祝いを申し上げる機会を得ましたことは、私にとりまして終生の喜びであり光栄でございます。

非常に政局が流動しておりますし、もし暇がとれて出席することができたら是非出席するようにと今堀先生から直接暖いお招きを頂きましたことを心から感謝している次第です。

広島大学が東広島市への統合移転を契機とされて全学的な改革整備の構想を練り上げ、その着地として本年度総合科学部の発足をみましたことは本学の新しい若々しい展開を告げる要証であり心からお喜び申し上げます。

総合科学部の狙いとされる場所は、一般教育の改革と新しい総合的な分野における教育、研究体制の確立にあると承っておりますが、一般教育の改善充実是我国の大学にとりまして積年の課題であり全ての大学が苦悶しているところでございます。また、一方学問研究の高度化、専門分化の著しい中で高い次元における総合性と専門性の調和、時代の要請に応じる教育、研究領域の開拓が現在の大学に強く求められているところでございます。広島大学が他大学に先駆て教養部を母体として本学部を創設することになり、これらの課題に答えるべき新しい方向を打ち出されたことは、本学のみならず我国の大学改革にとってその意義、誠に大きなものと存じます。

地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学の4つのコースを本年度を初年度とし、学年進行によって作ってまいるわけでございますが、その2年目であります50年度予算を目前にしまして文部省としましても本学部が基底計画を予定どおり熟しているように目下努力中でございます。

簡単ではございますが、以上をもって開会の挨拶にかえさせていただきます。

(文部省大学局長 井内慶次郎)

それにしましても49年度にスタートできたということは本当に天佑神助のような感がございます。50年度予算編成の厳しさを連日連夜味わっている昨今でございますのでこの感が特に深いのであります。50年度総合科学部発足という時点でありましたら、恐らく現在のような構想でスタートすることは非常に難しかったという気が予算を担当している者としていたします。その意味では、49年度に総合科学部を発足できたということは、本当によかったなと私は思っております。只今50年度予算編成を目前にしておりますが、文教関係の仕事を取りまとめてまいりますためには、これを取り巻いている諸条件は、日一日と厳しくなる、難しくなっていると私はしみじみ思うのであります。

昨夜、東京の自宅で本日、大学の方にお邪魔することになりましたので、丁度約10年前、大学課長在任中に旧制大学の理学部長会議が広島大学で開催されてその会議に参加したことがございます。前川先生が理学部長在任中の時でございました。その時、教養部長が羽白先生でございました。羽白先生に、折角広島大学に来たのなら日曜日、半日つきあえといわれまして宮島にまいりました。丁度新入生に対するオリエンテーションの合宿が行なわれていた時です。その際、羽白先生のお勧めで学生の方々の前で若干話しをし、寮歌を歌ったりしたこと等を昨夜もしみじみと思い出しておったのでございますが、今日羽白先生はおられないようですし、敢て御紹介したいと思います。広島大学に参りまして帰ってしばらくして羽白先生から還曆に当たってまとめられた随筆を送って頂きました。

昨夜、羽白先生の随筆を久し振りに手にしまして開いてみましたら、赤鉛筆で線を引いているところが数箇所ございました。それを昨夜読み直しているうちに、その二、三を御祝詞を申し述べる際に私事で誠に恐縮でございますが、是非ご紹介してみたいと書きとめてまいりましたのでそれを御紹介したいと思います。

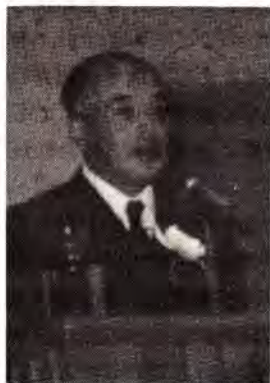
「夜更に本を読み、長い手紙を書き、そして何か

をみつめている若者の美しい姿に、何もかも勝ちま
さるものはない。この実相を直視するだけの勇気
と、人間の魂と直に語らんとする愛を書いてはなら
ない。一体、何が好きなのか、何をやりたいのか、
やりたくてたまらないものを持って、それに惚こんだ
という直向な気持を持って、内海の潮騒に頷くに、静
もる僅少の密やかになるを聞かんとするも、寧、自
れを閉ざし、自れに沈潜するもよしとするもの、厳
しく自己をムチ打って本懐とするもの、さては敢て
人にまみれて活路を見出さんとするもの、千思万考
なるべし、さもあらばあれ、すべからく懶惰をたち、
陰湿を捨てさるべし、時は決してむなしく過ぎるも
のではない。重要なことは、その矛盾を凝視するこ
とであり、その嘔吐感に耐えることである。勇者は
その傲れる冠をぬげ、敗者はその卑屈なる靴を投げ
捨てよ。」というところを特に赤線を引っぱってお
りましたので、昨夜この辺を読んでおりました、何
んとなく心のたかまりを感じたのであります。44年
11月23日、読了と記してあります。

敢えて羽白先生の文章を読み上げましたのは、旧
制広島高等学校に学ばせて頂いた一人として総合科
学部に旧制高校のロマンと情熱を求めたいが故であ
ります。旧制大学の伝統と旧制高校の伝統とそれに
新制大学の貴重なる経験が織りなされて、初めて総
合科学部はその花を咲かせることができるのではな
いかと思います。

夏半、学部からお送り頂きました総合科学部広報

＜ 祝 辞 ＞



まことに僭越でござい
ますが、広高同窓会を代
表して、祝辞を申し上げ
ます。本日は総合科学部
創設を記念して開催され
たこの意義ある式典に、
私共広高同窓会の者多数
ご招待をいただきまして、
まことに有難く厚く御礼
申し上げます。

昨年10月広高創立50年祭を広島で行いましたとき
に、来賓として出席された飯島広島大学々長は、そ
のお祝辞の中で広島大学では総合科学部という新学

委員会の編集されました7月8日№1を拝見しなが
ら、しみじみ左様に思ったのであります。

なお、この機会にお礼を申し上げたいと思いま
すのは、同誌上に浜井一郎氏、山本正男氏の一文が載
せられていたことであります。大学の広報委員会に
出されます冊子に、元事務官又は事務官が一筆を
書き、それを載せているということは大変まれであ
ります。事務屋を総括する只今責任者であります
が、事務屋を代表して広報委員会の編集の方々にお礼を
申し上げたいと思えます。

これから総合科学部の歩んで行かれる道は、決し
て坦々たるものでなく極めて峻しいものがあるか
と思えますが、教官各位、事務職員の諸君ならびに
本学に入学された学生諸君、教職員、学生の皆様方
の暖かい心の通いというものが不可決であろうと思
います。その意味でこれからの学部が我国の唯一の
学部として、その道を切り開いていかれるにあたり
まして、どうぞ従前以上の教職員各位の学生を含め
ました人間的な結びつきを大事にされて前進して頂
きたいと存じます。飯島学長、今堀部長をはじめ関
係各位の今迄の御努力に対し心から敬意を捧げます。

本日の記念式典がその歩みを一層力強く前進され
ることを心からお祈り申し上げまして非常に軌道を
外れた御挨拶になりましたが、心からの御祝詞とさ
せて頂きます。

ありがとうございました。

(広島高等学校同窓会々長 佐藤 秀雄)

部創設の計画があり、この新学部は旧制広島高等学
校の基本的精神を新しく開花せしめて青年に与えたい
という念願に出発しているものであると述べられました。
私共広高同窓生は、広高の後継者の誕生する
ことを大いによろこんだのであります。何分新
学部の創設は中々容易なことではありませんから、
率直なところその実現は2・3年先のことと予想し
ていたのであります。しかるに飯島学長を始め広
大関係者の多大のご努力の結果、極めて迅速果敢に
その成果を挙げられ昭和49年度の国の予算で総合科
学部が全国ではじめて実現したのであります。その裏
には関係者の非常なご協力と多大のご苦心のあった
ことを拝察して、衷心感謝申し上げる次第であります。

又承りませば、この学部創設にあたっては、当時の文部省大学学術局長木田氏、同官房長井内氏等広高出身の同窓生が、日本の大学教育の根本的改革の必要性を認めて、これが実現に協力した由でありまして、私共同窓生としてはうれしき限りであり、同時にこの学部の発展に協力しなければならぬ責任を感じるものであります。

旧制高等学校の特色は何でありましょうか。簡単に表現することは困難であります。私の尊敬するある先輩（註、近衛内閣の文相であった安井英二先生）にこれを訊ねましたところ、その先輩は、それは未知数の魅力とでも云えましようかと答えられました。人間として大きな未知数であることの魅力を指摘されたものと思うのであります。私の率直な感想を申し上げて恐縮ですが、私が旧制中学から広高に入学して感じましたことは、旧制中学校においては、先生から受ける授業をそのまま受取るいわば受身の勉強でありましたが、広高に入って急に舞台が変わって自由でのびのびしたふん囲気であったことであります。勉強をさばればいくらでもさばれるのですが、周囲の友達が何かを求めて勉強をしており、或は哲学を論じ或は文学を語るのを聞いて、うっかりすると自分はこれについて行けぬ様に思ったのであります。中学時代の受身の勉強態度から自ら進んで自主的に勉強するように仕向けられたと思うのであります。自分の勉学に自分で責任を持つ環境は非常に有難いものであったと思います。今自分の広高時時代をふり返ってまことに努力の足りなかつたことや若気の至りであったことなど後悔することは多いのであります。それでも広高の3年間は学問の花園であり、師弟の関係、友情の関係でも花園の如きものであったように思われます。私達のその後の長い人生においてこの3年間はいつも心のふるさとであり、大きな力になっていると思うのであります。

総合科学部に入学された学生諸君は、多数の志願者の中から選ばれた優秀な素質をもった方々ばかり

りであります。大きな未知数として将来大きく成長する可能性を十分に持っておられるのであります。諸君の中にある驚くべき可能性を一步一步発掘していただきたいと思ひます。

総合科学部を創造して行かれるこれからの前途はまことにきびしいものと存じますが、それだけこの学生生活が充実したものとなると思うのであります。あとから考えて我が青春に悔いなしと云えるように毎日を大切にしたいと思ひます。

我々広高同窓生は相当年をとり、今考えますことは、国なり地域社会から受けた恩恵のまことに大きいと云うことであり、それに対して少しでも恩返しをしなければと云うことであります。同時に広高の道統と云いますか道の伝統を末永く世に伝えたいのであります。「広高その永遠なるもの」は広高生の合言葉であり、広高の生命を永遠なる生命として活かしたいのであります。その意味でも総合科学部と云うよき後継者の誕生は、まことに力強く感じることであり、その発展のためには協力を惜しまない所存であります。

先般今堀総合科学部長のご提案で、諸先生方と広高同窓生代表との懇談会が行われ極めて有意義であったと思ひます。又新学部の中に広高文庫を設けられるなど次々に連絡を密接にする努力をされてまことに有難いことであります。広高同窓会もいそがしくなつて来るような気がいたします。学生諸君は広高同窓生を親しい兄貴分として遠慮なしに相談をもちかけて貰いたいと思ひます。

「山を愛する者は、山から感化を受ける」と申します。学生諸君はわが総合科学部を愛し、わが広島大学を愛することが深ければ深いほどそれだけ大きな影響を受けられることを信じて疑いません。

終りに日本の大学教育を根本的に改革しようとする高い理想をもって設置されたこの総合科学部が関係各位のご協力で輝かしい成果を挙げられることを心から祈つて祝辞といたします。

≪ 祝 辞 ≫



本日は、総合科学部創設を記念し盛大かつ意義ある講演会並びに式典、祝賀会を設けて頂き、我々総合科学部生一同心よりお礼申し上げます。

入学当時、右も左も分らなかった我々第1回入学生もようやく他の学部との足並みも揃いこれから

自分の進むべきコースの選択を控えまして、改めて我が学部の将来を考え、同時にそれを左右する我々学生の責任を痛感しております。

ここに旧制高等学校同窓生の諸先生方並びに総合科学部教職員のスタッフの方々との接触の場に参加し、日本に最初にできたこの学部にしかも第1回生として迎えられたことを、この上もない誇りと感じております。

≪ 祝 辞 ≫

私は、本日お祝いを申し上げるというより、むしろ、お礼を申し上げなければならない立場であります。広島大学の総合科学部創立に関して大変お世話を頂いた方々、又本日総合科学部創立記念式には御遠方から文部省大学局長、名古屋大学長の御臨席を賜りました。又広島高等学校同窓会からは大変御丁寧な御祝辞を頂戴し、又先程は総合科学部における図書を整備のために御寄付を頂戴いたしました。これらの方々にたいして先ず学長として厚く御礼申し上げます。

総合科学部は先程から皆様のお話のように日本の国立大学の中で最初の学部として、我が広島大学にスタートしたわけであります。これは広島大学における大学改革の第一歩であります。私共は総合科学部の発足に終ることなく、今後各学部並びに全学のあらゆる面において初期の改革構想を実現し就中我々が大学改革における最も基本的な課題として考えておりました。一般教育の回復と充実、並びに研究体制の整備、発展ということを是非着々と将来に

(総合科学部学生代表 植木 健)

私は入学以来、広島のおちこちで、いや広島だけでなく故郷長崎でも広大な総合科学部とは、一体どんな学部ですか、と時おり聞かれることがあります。私はそのたびにこう答えることにしています。どんな学部か、それはまだ分かりません。むしろ、こんな学部だと型にはめこむことができないのが、総合科学部の特徴であって自分の個性と能力を思う存分発揮し伸ばせる学部だと思っております。つまり、自分達でつくり上げていく学部です。

全国から集った我々学生はこのように広島だけでなく日本全国の期待を担っている積りでおります。

就職や進学に対する不安が全くないと言い切れませんが、多くの方々の期待に応えるべくこの日を契機といたしまして、より一層の飛躍向上を期して努力を続けますこととお約束し、又今後とも我々への御指導、ご鞭撻賜りますことをお願いいたします。はなはだ簡単であります、御挨拶といたします。

(広島大学長 飯島 宗一)

向って実現してまいりたいと考えております。

総合科学部がその存在の意味を真に発揮しうるのは総合科学部が広島大学の中で単独に存在する状態ではなく、総合科学部と合いまって広島大学における研究教育のあらゆる問題がここに面目を一新する時に総合科学部は始めてその真の存在価値を発揮しうると思っております。その意味で本日御臨席を賜りました学外の方々に我々の大学が更に改革整備に向って努力するということに対して、今後共何分の御忠告、御援助を是非頂戴したいと思っております。

総合科学部は非常な抱負をもって出発した学部であります、しかしながら本日私は、この総合科学部創立記念式典にあたっていささか感慨無量なるものを覚えるものでございます。と申しますのは、本日ここに列席している学生諸君の大部分はそれを経験しなかったことでありますが、我々広島大学は昭和44年をピークにして、いわゆる大学紛争の波に巻き込まれたのであります。その大学紛争の一番争点に

なった部分は当時の教養部であります。本日ここに御列席の教養部の教官の方々はあの時代において大学紛争に当面し、学生の団交に当面し、粒々苦心された御記憶をなお鮮やかに保っておられると存じます。

当時の状況は、まさに広島大学の教養部はここをもって解体するのではないかというところまで事態が緊迫をつけ、或は深刻化したというふうに私は記憶しておりますけれども、しかしながら実はその大学紛争における深刻なる教官、学生の経験は新たに展開をし結晶しまして大学改革の方向を志向し、本日総合科学部の創立記念式典が出来るまでに発展をしてみたいのであります。

私共は、今ここに総合科学部の発足するにあたってやはりかの大学紛争に象徴されたところの様々な問題提起というものに対する我々の一つの回答ここに果し得たということを深く喜ぶと同時に、なお残されている今後の問題というものをかなり深刻に考えざるを得ないと思います。

当時の問題点は両面の問題があったと思います。勿論、急進的な学生諸君の論理は幼稚であり、又一面的であったとは申せませけれども、しかしながらその教官と学生との討議の間に浮び上がった問題というものは一つは、大学の現状の欠陥に対する厳しい反省であります。第2の問題は、未来に向かって大学は如何なる存在を主張し得るかという問題であります。前者に関しましては私共はこの総合科学部を実現することによって始めて教官数においても施設においても、研究費用予算においても或は近い将来西条統合移転を迎えて決してぜいたくでないにしても最少限度我々の教育研究というものを貫ぬき得る条件ということを我々自からの努力を核とし、また国民の方々の御支援というものを賜わって実現をしていく見通しがここに出来てきたように思います。

しかしながら総合科学部の問題点並びに広島大学の背負うところの問題点はむしろ今後の日本、今後の世界の中において我々の大学、我々の学部が如何にその存在を示すことができ、如何にその存在を身につけることができ、またそこから人類に向かって何を創造し、何を寄与できるかという問題であると思います。

この総合科学部の内容につきましては、紛争の苦しい経過の中で総合科学部の現教官の多数の方々が大変な労働、大変な時間を費して改革構想のために討議を繰り返され、また全学のレベルでも大学改革

委員会等を中心に恐らく今時間をもって教えることのできないほど大変な討論と思考と、そして計画を繰り返していたように思います。

私の願うところは、どうか我が総合科学部はその総合科学部誕生における極めて真剣な経験とその間に交されたところの教官、学生間の真摯な討論というものを決して忘却することなくそれを将来に向けて生かすように進んで欲しいと思うのであります。その中で将来に向かって総合科学部が構想された一つの中核の問題が何であるかといえ、それは人間の精神、人間の英智に対する信頼の上に我々は新しい大学、新しい学問を打ち立てようとする決心であったと思います。

総合科学部という言葉は耳なれない言葉でありますけれども、それを我々のそういう理想を表現する適切なる日本語が現在存在しないが故に止むを得ず借りている言葉であります。総合科学部という言葉に秘められているものは、実は人類の将来を切り拓くのは、人類自体の精神と人類自体の英智に対する信頼以外何ものでもないというそういう経過の中からの決意と私は思います。またその決意は、奇しくも恐らく否定の否定という経過をとって、実は静かに考えてみるとこれは今日、昭和40年代の今日本に発生した考え方ではなくて我々の祖先以来、長い日本の文化、日本の教育の風土の中で繰り返しその時代時代の背景というものを踏まえながら探求されてきたところの課題であります。最も近くは、旧制高等学校の伝統、昭和20年以來の新制大学の経験、それらのものの中で我々の未来に対する予見に対して再びそれを発掘し、再発見しそれを伝統と歴史の上に生かしていくということをも同時に含んでいた筈です。

昨年、広島高等学校創立50年祭の式典で私は広島高等学校同窓生の方々にその意味で旧制高等学校の担っていた真理を我々広島大学、我々広島大学総合科学部は受け継ぎたいということを申しました、どうか総合科学部教官ならびに学生諸志が以上のような並々ならぬ因縁をもって発生したところの総合科学部の意義を明示して頂いて我々が期待するところの発展を終身希望いたします。

また、ここに総合科学部は総合科学部個々の学生諸君がrippana人間に成長することだけがこの存在の目的ではありませんけれども、全学の広島大学に学ぶ学生諸君に単なる専門教育だけでなく、人間としての深い素養を与えるという責任を総合科学部

は背負っております。また、総合科学部の学生諸君もそういう学友諸君に対しても自からをひらき共に学んで、広島大学全体の教育研究の内容を豊かにするという責任を忘れないで欲しいと思います。

先程、学生諸君のお話しにあるように、総合科学部は現在未だ何がそこから出てくるかということをお小さく決めるべき段階の学部ではないと思います。今後に総合科学部の発展は色々な問題を含んでおりますけれども、一番大事な問題は人であります。良き教室をもち、良き学生をもつということであります。第2には、その総合科学部が大学を名乗る以上、如何なる学問をその中に創造しもつかということであります。第3には、この総合科学部が広島大学全体の中で、日本の中で、或は将来の人類社会の中で自からをいかなるところに位置づけるかというオリエンテーションの精神を失なわないことでもあります。

しかしながら私は人と学問とその位置づけを誤まらない限り総合科学部は、どうぞ弾力的に、自由に、ダイナミックにその範囲において可能な創造というものを遠慮なく進めていってもらいたいと思います。

その際、最も大事なことはコンプレックスの解消でございます。これは私は率直に申しますが、大学において、教育の場において、学問の場において最も我々を阻害するところのものはスベリオール・コンプレックスとインフェリオール・コンプレックスです。教育と学問の場において我々はあらゆるコンプレックスを取り払って最も自由な境地に教官、学生共々我々を位置づけることが絶対必要であります。

先程、井内局長は羽白名誉教授の言葉を御引用になりましたけれども、羽白名誉教授の言葉の中にあるその趣旨もまた真の意味の自由人としての学生の在り方、教官の在り方であろうと思います。そのような意味で総合科学部はあらゆる可能性を抱いていると私は確信いたします。

どうぞ教官諸志ならびに学生諸君はこの希望にもえた出発点を永久に銘記すべく、今後あらゆる努力をはらって頂きたいと存じます。

お礼に併せて所感の一端を申しのべて、本日の私の挨拶にかえたいと思います。

各種行事報告

昭49.6.7(金) 総合科学部発足

7.8(月) 10:30 <<教育学部大講義室>> 入学式

13:00 ~ ガイダンス, 記念撮影

7.9(火) 9:00 ~ <<総合科学部大会議室>>

講演会: 大学教育について

一般教育について

健康と集団生活について

学生生活について

13:00 ~ サークルオリエンテーション,

図書館紹介

7.10(水) 9:00 ~ 英語のクラス分け

8.2(金) ~ 3(土) <<西条共同研修センター>>

エクスカージョン

○ 講演: 私の歩んだ道... 式部教育

: 学生生活を考える...

今井(日) 教官

: 生命の鎖... 兼田教官

○ 全体行事(ソフトボール・トーナメント)

優勝: 教職員チーム

2位: 中峯・兼田グループ

3位: 高崎・檜原グループ

4位: 中川・秀グループ

5位: 陣崎・佐久間グループ

6位: 小野(茂)・今井(日)グループ

7位: 岡本(雅)・古前グループ

○ グループ別行事

11.16(土) 13:00 ~ 17:00

<<本部南グラウンド・バレーコート>>

総合科学部創設記念学生行事(ソフトボール・バレーボール・トーナメント)

優勝: 小野(茂)・今井(日), 岡本(雅)・古前チーム

2位: 教職員チーム

3位: 山田・檜原・陣崎・佐久間チーム

4位: 中川・秀・中峯・兼田チーム

11:30(土) 13:00 ~ 15:00 <<教育学部大講義室>>

総合科学部創設記念講演会

演題: 過剰と不足

講師: 名古屋大学長 芦田 淳氏

17:00 ~ 18:00 <<教育学部大講義室>>

総合科学部創設記念式典

18:00 ~ 20:00 <<大学会館大集会室>>

総合科学部創設記念祝賀会

編集後記

本号から『総合科学』改め『飛翔』とすることになった。昨年7月の創刊号で書いたように、学生諸君との共同編集を最初から考えていたのであるが、当初教官側の委員には多少事の成否を危ぶむむきがないでもなかった。

それというも従来一般に学部報なるものが弾力性に乏しい無味乾燥なものに傾きがちで、学生の興味をひかないくらいがあったのだ。一つにはこの事実が逆に教官、学生一体となった共同編集という形を我々にこいねがわせた契機でもあった。新しく創設された若い学部のもつ可能性からして、それは実現できるはずである、と。

学生側の委員諸君から意欲に充ちた企画が出され、ともすればマンネリズムに陥りがちな教官側への刺戟となって、先ずはごらんのような『飛翔』創刊号が出来上ったわけである。名称は総合科学部の全教職員学生から公募した。百をこえる応募名の中から委員全員でこの名前をえらんだ。我々の学部の未来への姿勢を見事にとらえてはいないだろうか。題簽は本学東雲分校の森井一幸先生を労わした。厚くお礼申し上げる次第である。

総合科学部は理性と感性の調和した学問本来の姿を無限に伸張させて行こうとする学部である。そして創設から一歩ふみ出した今、理想へ向って日々具体的な事実を積み重ねて行かなければならないという現実がある。この方向に沿いながら我々広報委員会は視点を定めて行きたい。(T)

